

入耕地遺跡（第10・12地点）

市内遺跡群発掘調査報告書XXVI

2019

白岡市教育委員会

白岡市埋蔵文化財調査報告書第28集

入耕地遺跡（第10・12地点）

市内遺跡群発掘調査報告書XXVI

2019

白岡市教育委員会

序

このたび白岡市教育委員会では、『入耕地遺跡（第10・12地点）』の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

白岡市は都心への通勤圏ということもあり、平成以降住宅やマンション建設が相次いできました。平成24年10月には、目覚ましい人口増加を背景に市制が施行されました。一方で郊外ではまだ緑豊かな田園風景が広がっています。

入耕地遺跡は、これまで多数の発掘調査が行われ、数多くの調査成果が上げられてきましたが、今回報告します第10・12地点においても、今から3千年から2千3百年前の縄文時代後期から晩期を中心に重要な成果を得ることができました。発見された豊富な縄文土器や石器に加え、埼玉県内でも出土事例の少ない亀形土製品を含む出土遺物の数々は、入耕地遺跡内に展開する環状盛土遺構に伴うものであり、太古の昔に根付いた人々の活発な活動が窺われます。

教育委員会では、地域文化の特色を生かしながら、あらゆる機会と場所での生涯学習を目指す「白岡らしさの発見と創造」を目標に掲げております。当報告書が市民の皆様や学校等関係機関の方々に広く活用され、郷土白岡の再発見と埋蔵文化財保護のご理解につながれば幸いです。

最後に、今回の発掘調査及び報告書作成に当たり、地権者や事業主様、地域の方々には格別のご支援とご理解を賜りました。ここに心より厚く御礼申し上げます。

平成31年3月

白岡市教育委員会
教育長 長島 秀夫

例 言

- 1 本書は、埼玉県白岡市内に所在する入耕地遺跡（第10・12地点）の発掘調査報告書である。
- 2 調査地点所在地は以下のとおりである。
入耕地遺跡（第10地点）：白岡市白岡909-1
入耕地遺跡（第12地点）：白岡市白岡904-1の一部
- 3 発掘調査は、白岡市教育委員会が主体となって実施した。調査費用及び整理作業費用は白岡市教育委員会が負担し、一部は国庫及び県費補助金を受けて実施した。
- 4 調査期間は、以下のとおりである。
入耕地遺跡（第10地点）：平成23年4月6日から平成23年4月27日（国庫補助事業）
入耕地遺跡（第12地点）：平成29年2月27日から平成29年3月13日（国庫補助事業）
- 5 指示通知番号は、以下のとおりである。
入耕地遺跡（第10地点）：平成23年2月25日付け教生文第5-1278号（指示）
平成23年4月19日付け生学第4号（通知）
入耕地遺跡（第12地点）：平成29年2月22日付け教生文第5-1529号（指示）
平成29年2月21日付け生学第605号（通知）
- 6 発掘調査は、第10地点を奥野 麦生と杉山 和徳、岡田 勇介が、第12地点を杉山が担当した。整理作業及び報告書作成作業は、奥野と杉山が担当した。
- 7 遺物の実測は、奥野と杉山が担当し、青木 美代子、増田 香織の補助を得た。
- 8 本書の執筆分担は以下のとおりである。
Ⅲの遺物：奥野
それ以外：杉山
- 9 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、地権者である角田 和雄様、川島 由宣様様の御理解、御協力を得て実施した。また、下記の諸氏及び諸機関から御指導と御助言を賜った。
池尻 篤、植木 雅博、鬼塚 知典、金子 直行、河井 伸一、幸泉 満夫、小宮 雪晴、篠田 泰輔、鈴木 敏昭、関 絵美、田中 和之、守谷 健吾、油布 憲昭。
公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、埼玉県教育委員会文化資源課、白岡市文化財保護委員会、東部地区文化財担当者会（50音順、敬称略）。
- 10 発掘調査及び整理作業にあたっては、下記の方々の参加協力を得た。
青木 美代子、桂 都、黒田 雅之、坂田 玲子、菅原 春男、高橋 安代、田中 玉緒、鳥海 恵子、中尾 亜子、中山 敏夫、藤巻 良雄、植島 武二、増田 香織、水沢 和子、渡辺 英子（50音順、敬称略）。
- 11 調査組織は以下のとおりである。
調査組織（平成30年度）
調査主体者 白岡市教育委員会
事務局 教 育 長 長島 秀 夫
生涯学習部長 篠塚 淳
学び支援課長 阿部千鶴子
学び支援課長補佐 中 太 隆 明
図書館担当／
文化振興担当主査 奥野 麦生（調査担当） 同主任 杉山 和徳（調査担当）

凡 例

- 1 本書で用いる方位は国土座標の方位で、標高は海拔を表す。
- 2 使用した基準点と遺跡原点（日本測地系平面直角座標第9系）は以下のとおりである。
入耕地遺跡：X = 1,710.988 m, Y = -15,493.437 m (5B コウ81)
X = 1,709.000 m, Y = -15,493.000 m (遺跡原点)
巻末抄録の経緯度は遺跡原点を世界測地系に変換したものである。
- 3 本書で掲載した図版の縮尺は原則として以下のとおりである。
遺構：1/60 遺物：土器実測図・拓影図・石器実測図1/3
- 4 挿図と表中の略号は以下のとおりである。
SB：掘立柱建物跡 SK：土坑 SD：溝跡 SE：井戸跡 P：ピット
- 5 遺構の計測表・遺物の観察表において残存値には（ ）を付して表記した。
- 6 実測図中の断面の●は繊維土器を表した。
- 7 磁着度はリング状フェライト磁石（30×17×5mm）を用いて、資料の磁着反応を1から順に数字で評価したもので、数値が大きいかほど着磁性が強いことを意味する。磁石を用い、35cmの高さから木綿糸で吊り下げた状態で使用する。資料を順次接近させることにより磁石が動き始める距離単位（6mmを1単位とする）を評価台紙上で読み取り、数値化された遺物の評価をする方法である。磁着度0は非磁着を表す。

目 次

序		(3) 溝跡…………… 9
例言		(4) グリッド出土遺物……………15
凡例		2 第12地点の遺構と遺物……………54
目次		(1) 掘立柱建物跡……………54
		(2) 土坑……………54
I 調査の概要…………… 1		(3) 溝跡……………54
1 調査に至る経緯…………… 1		(4) 井戸跡……………57
2 調査の経過…………… 1		(5) 地下式坑……………59
		(6) 調査区出土遺物……………64
II 位置と環境…………… 2		
1 遺跡の立地と地理的環境…………… 2	IV 総 括……………68	
2 歴史的環境…………… 2	1 第10・12地点の成果……………68	
	2 溝跡について……………68	
III 調査の成果…………… 6		
1 第10地点の遺構と遺物…………… 6	写真図版	
(1) 掘立柱建物跡…………… 6	報告書抄録	
(2) 土坑…………… 6		

挿 図 目 次

第1図 入耕地遺跡と周辺の遺跡分布図…………… 4	第15図 グリッド出土遺物 (6)……………21
第2図 入耕地遺跡の位置と発掘調査区…………… 5	第16図 グリッド出土遺物 (7)……………22
第3図 第10地点実測図…………… 7	第17図 グリッド出土遺物 (8)……………23
第4図 調査区土層断面図…………… 8	第18図 グリッド出土遺物 (9)……………24
第5図 調査区地形図…………… 9	第19図 グリッド出土遺物 (10)……………25
第6図 第1号掘立柱建物跡……………10	第20図 グリッド出土遺物 (11)……………27
第7図 第1～6号土坑……………11	第21図 グリッド出土遺物 (12)……………28
第8図 第1・2号溝跡……………12	第22図 グリッド出土遺物 (13)……………30
第9図 掘立柱建物跡・土坑・溝跡出土遺物…13	第23図 グリッド出土遺物 (14)……………31
第10図 グリッド出土遺物 (1)……………14	第24図 グリッド出土遺物 (15)……………33
第11図 グリッド出土遺物 (2)……………16	第25図 グリッド出土遺物 (16)……………34
第12図 グリッド出土遺物 (3)……………17	第26図 グリッド出土遺物 (17)……………35
第13図 グリッド出土遺物 (4)……………18	第27図 グリッド出土遺物 (18)……………36
第14図 グリッド出土遺物 (5)……………19	第28図 グリッド出土遺物 (19)……………38

第29図	グリッド出土遺物 (20).....	39	第43図	第7号土坑.....	56
第30図	グリッド出土遺物 (21).....	40	第44図	第3号溝跡.....	56
第31図	グリッド出土遺物 (22).....	41	第45図	第1号井戸跡.....	56
第32図	グリッド出土遺物 (23).....	42	第46図	第1号地下式坑.....	56
第33図	グリッド出土遺物 (24).....	44	第47図	掘立柱建物跡・土坑・溝跡・井戸跡・ ピット出土遺物.....	58
第34図	グリッド出土遺物 (25).....	45	第48図	溝跡出土遺物.....	59
第35図	グリッド出土遺物 (26).....	47	第49図	地下式坑出土遺物 (1).....	61
第36図	グリッド出土遺物 (27).....	48	第50図	地下式坑出土遺物 (2).....	62
第37図	グリッド出土遺物 (28).....	49	第51図	地下式坑出土遺物 (3).....	63
第38図	グリッド出土遺物 (29).....	50	第52図	調査区出土遺物.....	65
第39図	グリッド出土遺物 (30).....	51	第53図	地下式坑・調査区出土遺物.....	66
第40図	グリッド出土遺物 (31).....	52	第54図	第8・9地点の調査区とトレンチ・溝跡 配置図.....	69
第41図	第12地点全測図.....	55			
第42図	第2号掘立柱建物跡.....	56			

表 目 次

第1表	周辺遺跡地名表.....	3	第5表	第2号掘立柱建物跡ピット計測表.....	57
第2表	第1号掘立柱建物跡ピット計測表.....	10	第6表	第12地点ピット計測表.....	57
第3表	第10地点ピット計測表.....	10	第7表	第12地点出土石器計測表.....	67
第4表	第10地点出土石器計測表.....	53			

写真図版目次

図版1	掘削作業状況 実測作業状況 第10地点作業の様子 第12地点作業の様子		第2号溝跡	
図版2	第10地点調査全景 第1号掘立柱建物跡		図版5	A2・3グリッド遺物出土状況 B2グリッド遺物出土状況
図版3	第1・3号土坑 第2号土坑 第4号土坑 第5号土坑 第6号土坑 A3グリッド亀形土製品出土状況		図版6	掘立柱建物跡・土坑・溝跡出土遺物 グリッド出土遺物① グリッド出土遺物② グリッド出土遺物③
図版4	第1号溝跡		図版7	グリッド出土遺物④ グリッド出土遺物⑤ グリッド出土遺物⑥ グリッド出土遺物⑦
			図版8	グリッド出土遺物⑧ グリッド出土遺物⑨

- グリッド出土遺物⑩
 グリッド出土遺物⑪
 図版9 グリッド出土遺物⑫
 グリッド出土遺物⑬
 グリッド出土遺物⑭
 グリッド出土遺物⑮
 グリッド出土遺物⑯
 図版10 グリッド出土遺物⑰
 グリッド出土遺物⑱
 グリッド出土遺物⑲
 グリッド出土遺物⑳
 グリッド出土遺物㉑
 図版11 グリッド出土遺物㉒
 グリッド出土遺物㉓
 グリッド出土遺物㉔
 グリッド出土遺物㉕
 図版12 グリッド出土遺物㉖
 グリッド出土遺物㉗
 グリッド出土遺物㉘
 グリッド出土遺物㉙
 グリッド出土遺物㉚
 図版13 グリッド出土遺物㉛
 グリッド出土遺物㉜
- グリッド出土遺物㉝
 グリッド出土遺物㉞
 グリッド出土遺物㉟
 図版14 グリッド出土遺物㊱
 グリッド出土遺物㊲
 グリッド出土遺物㊳
 図版15 第12地点調査全景
 第2号掘立柱建物跡
 図版16 第7号土坑
 第3号溝跡（東より）
 第3号溝跡（南より）
 第1号井戸跡
 第1号地下式坑（西より）
 第1号地下式坑（北より）
 図版17 掘立柱建物跡・土坑・溝跡・井戸跡・
 ビット出土遺物
 溝跡出土遺物
 地下式坑出土遺物①
 地下式坑出土遺物②
 図版18 地下式坑出土遺物③
 調査区出土遺物
 地下式坑・調査区出土遺物①
 地下式坑・調査区出土遺物②

I 調査の概要

1 調査に至る経緯

白岡市は埼玉県東部に位置する総面積24.92km²の市で、東西約10km、南北約6kmと東西方向に長い。市の中央部を南北にJR宇都宮線（東北本線）、東北新幹線、東北自動車道等が貫き、JR白岡駅・新白岡駅周辺や主要地方道（県道）さいたま・栗橋線沿いに市街地が形成されている。しかし市街地外縁には水田や畑地、特産の梨の畑等が営まれ、水と緑の豊かな光景が広がる。

昭和29年に篠津村と大山村及び日勝村の3村合併により誕生した白岡町は、当初純農村的な町であった。しかし、昭和33年の東北本線の電化、同40年代初頭の県道大宮・栗橋線（現さいたま・栗橋線）や国道122号など主要道の開通などをきっかけに、都心から40km圏内である当市はベッドタウン化が顕著となった。平成以降は駅周辺にマンションや集合住宅の増加が目立ち、山林は分譲宅地に姿を変えつつある。中高層のマンション開発も進み、今後も市域における開発の激化が予想される。

また、平成22年度には、市域北部で首都圏中央連絡自動車道（圏央道）と東北自動車道を接続するジャンクション建設（久喜白岡ジャンクション）が完了し、交通網の発達が目ざましい。人口の増加を背景に、平成24年10月には市制を施行した。

このような情勢のなか、白岡市教育委員会では公共及び民間の開発事業と埋蔵文化財保護の調整に努めてきた。開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）に該当する場合は事前に試掘調査等を行い、遺跡の破壊が免れない場合には事前に発掘調査による記録保存を実施している。今回報告する入耕地遺跡（第10・12地点）の発掘調査は、以下の経緯で調整された。

2 調査の経過

入耕地遺跡（第10地点）は、周辺の発掘調査成果等によって、遺構・遺物の広がりが確実であることから発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の北寄りに位置し、標高は約13mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成23年4月6日	準備作業、テストピット掘削
4月11日	表土除去
4月12日～26日	包含層掘削、遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
4月27日	埋め戻し作業、調査終了

入耕地遺跡（第12地点）は、平成29年2月9日に実施した試掘調査の結果を受け、同年中に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の中央に位置し、標高は約13mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成29年2月27日	表土除去
2月28日	周辺環境整備
3月1日～8日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
3月13日	埋め戻し作業、調査終了

II 位置と環境

1 遺跡の立地と地理的環境

入耕地遺跡の位置する地域は、近世村名をとって白岡地区といわれ、地形的には大宮台地白岡支台上にあたる。白岡支台は久喜市除堀付近から、当市の篠津地区、白岡地区、小久喜地区を経て、蓮田市黒浜付近まで南北約9kmにわたって展開している。支台の東側に広がる沖積地は「日川筋」と呼ばれる利根川水系の旧河道である。西側には元荒川の沖積低地が広がっている。

白岡支台の特徴は、北部と南部で標高や低地との比高差が異なることである。北部では標高12m、低地との比高差は1mほどと低平なのに対し、南部では約15~16m、比高差5~6mと明瞭な崖線を形成する。これは埼玉県加須市を中心とする関東造盆地運動に起因するといわれている。また支台の東縁と西縁の地形形状も対照的で、東縁は沖積低地との差が不明瞭なのに対し、西縁は支谷が発達し切り立った崖線を形成するという特徴がある。

2 歴史的環境

大宮台地白岡支台上に展開する遺跡の内、入耕地遺跡周辺の代表的な遺跡を通時的に概観する。

旧石器時代の遺跡としては、層位的な出土ではないものの、入耕地遺跡をはじめ白岡支台西縁部の山道跡やタタラ山道跡、小久喜地区の南鬼窪氏館跡などで、ナイフ形石器や角錐状石器等が出土している。

縄文時代は早期から晩期までの遺跡が見られる。縄文時代前期初頭の花積下層式期では、タタラ山道跡で住居跡40軒以上や炉穴群が検出され、埼玉県下でも屈指の規模の集落であったことが判明した。同遺跡の豊富な遺構、遺物量、ことに造形豊かな石製裝飾品群の出土は、今後の該期文化の研究を強力に推進するものとなる。前期後半以降は、諸磯Ⅱ式期に茶屋遺跡やタタラ山道跡で住居跡や土坑等が検出されるものの、集落規模は縮小傾向にある。

再び集落遺跡が確認されるようになるのは、縄文時代中期後半の加曾利Ⅴ式期からで、山道跡をはじめ、新屋敷遺跡やタタラ山道跡などでも一定規模の集落の展開が明らかになっている。

縄文時代後期から晩期になると、再び遺跡数は集約されるかわりに、一遺跡において膨大な量の遺構と遺物を伴うようになる。入耕地遺跡では堀之内式期と加曾利Ⅱ式期及び安行3a~3d式期の集落が形成され、昭和26年には國學院大學考古学会が発掘調査を行っている。入耕地遺跡は、小支谷を挟んで北側の正福院貝塚と一体となって環状盛土遺構を形成している。

弥生時代から古墳時代にかけては遺跡分布が希薄になる。古墳時代前期では入耕地遺跡や茶屋遺跡で住居跡が認められ、一定規模の集落規模の展開が窺われるほか、正福院貝塚では方形周溝墓が検出されている。一方、古墳時代中・後期は中妻遺跡や神山道跡で住居跡が数軒検出される程度である。

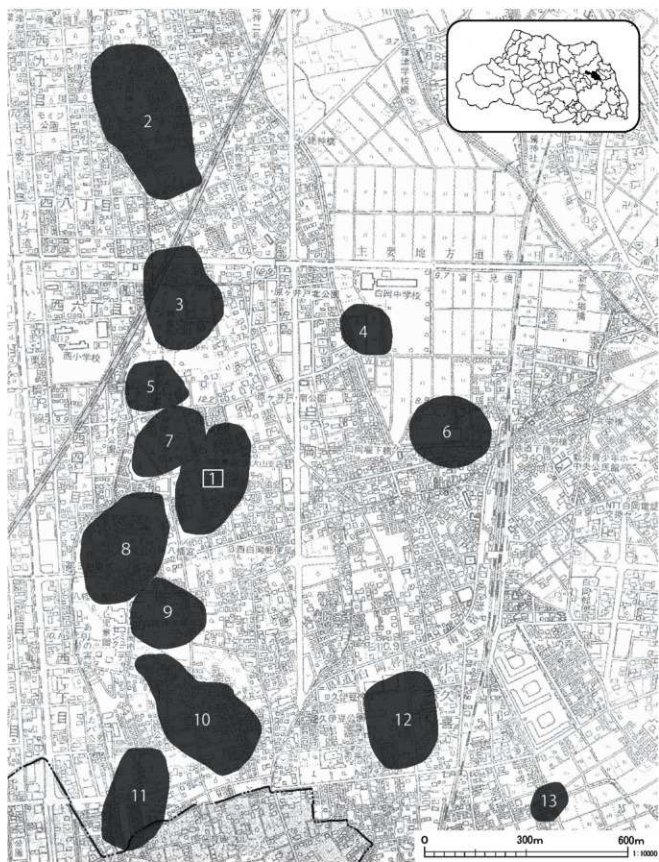
奈良・平安時代では、中妻遺跡が居住域及び生産域の中心であったと考えられる。中妻遺跡では精錬作業を含む製鉄を行っていた8世紀代の鍛冶工房跡が検出された。山道跡や南鬼窪氏館跡においても同時期の炭焼窯跡が検出されており、鍛冶関連遺構への炭の供給が想定される。

中世では、入耕地遺跡で堀に囲まれた14~16世紀の館跡とともに舶載陶磁器類が多数出土している。

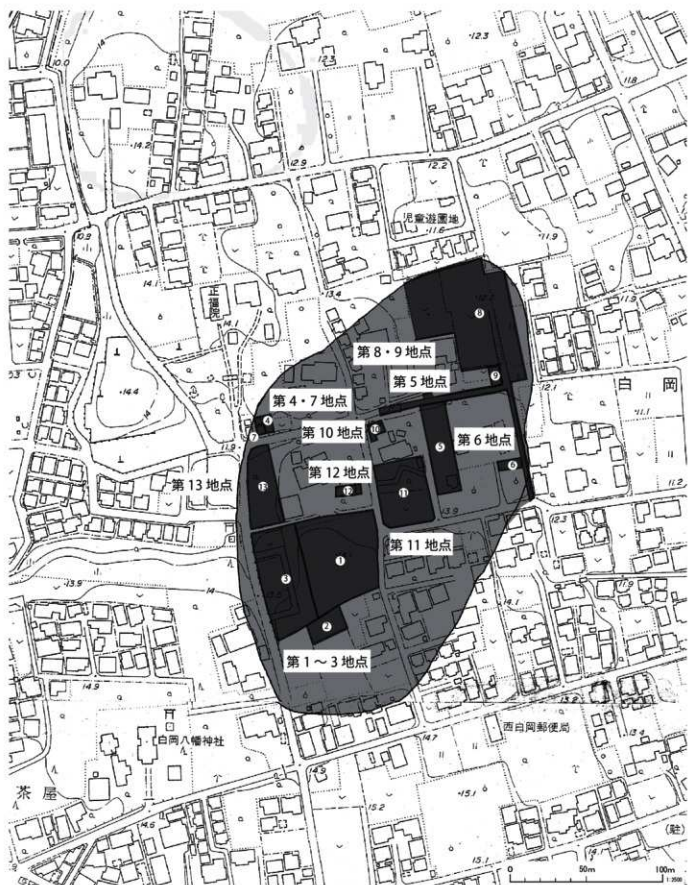
また、中妻遺跡においても掘立柱建物跡群や大規模な堀が検出されている。白岡支台は中世の埼玉郡に属し、武蔵七党の野与党の有力一族、鬼窪氏が本貫地としたといわれる。遺跡周辺に存在する白岡八幡宮や正福院、篠津久伊豆神社などは、草創や社殿造立に同氏との関わりが伝承されている。

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	発掘調査(年度)
1	入耕地遺跡	白岡字茶屋・東	縄文早・前・後・晩、古墳前、中世、近世	昭和26・平成3・4・7・15・16・17・19・23・25・28・30
2	中妻遺跡	篠津字中妻・神山・磯・宿	縄文早～後、古墳前～後、奈良・平安、中世、近世	平成12・14・16・18・21・22・24・25・26・27・28
3	神山遺跡	篠津字神山・白岡東	縄文前・中、古墳中・後、中世、近世	昭和51・平成5・12・17・25・26
4	西下谷遺跡	白岡字西下谷・東	縄文中、古墳前	
5	白岡東遺跡	白岡字東	縄文早・前・後、中世	
6	七カマド遺跡	白岡字東下谷	縄文後、中世、近世	平成22
7	正福院貝塚	白岡字茶屋	縄文早～晩、古墳前、中世、近世	昭和62・平成13
8	茶屋遺跡	白岡字茶屋	縄文早・前・後、古墳前	昭和57・平成6・8・13・14・18
9	新屋敷遺跡	白岡字茶屋	縄文早～後、平安、近世	平成6
10	山遺跡	白岡字山	旧石器、縄文中～後、古墳前、奈良・平安、中世、近世	昭和62・平成2・9・11・12・18・21・23・25・27
11	タタラ山遺跡	白岡字山	旧石器、縄文中～後、古墳前、奈良・平安、中世、近世	昭和59・平成4・6・11・12・13・25・29
12	南鬼窪氏館跡	小久喜字中村	旧石器、縄文中～晩、奈良・平安、中世、近世	平成7・9・18・19
13	神辺遺跡	小久喜字神辺	縄文中、近世	



第1図 入耕地遺跡と周辺の遺跡分布図



第2図 入耕地遺跡の位置と発掘調査区

III 調査の成果

1 第10地点の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

●第1号掘立柱建物跡（第6図）

B3・C3グリッドに位置し、第3号土坑を切る。調査区内で6基の柱穴を検出したが、さらに調査区外にも建物を構成する柱穴が展開するようである。桁行4間以上、梁行1間以上の側柱建物で、主軸方位はN-87°-Eを指す。検出部分のみで桁行約6.2m、梁行約2.6mを測る。柱穴の規模は第2表のとおりである。

出土遺物（第9図）

土器 9~11は晩期安行式期の粗製深鉢の口縁部資料である。砲弾形を呈し、口縁部は直立からやや内湾傾向を示す。いずれも口縁部に粘土紐を貼りこの上から刻みを施す。12は外反する無文の口縁部資料で、平縁をなすものと思われる。13~16は無文の胴部資料、17は右下がりの条線文の施された胴部資料である。なお、12・17はビット4、9・10・14・15はビット5、11・13・16はビット6からの出土であるが、いずれも柱抜き取り後の埋没土への混入であろう。

(2) 土坑

●第1号土坑（第7図）

A3グリッドに位置する。平面形は長径約1.6m、短径約1.5mの不整形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第9図）

土器 1は右下がりの、2は左下がりの条線文の施された胴下位の破片である。後者は土製円盤である可能性もある。3は薄手無文の資料、4は斜位から縦位のやや幅の広い条線風のなでが施される胴部資料である。

●第2号土坑（第7図）

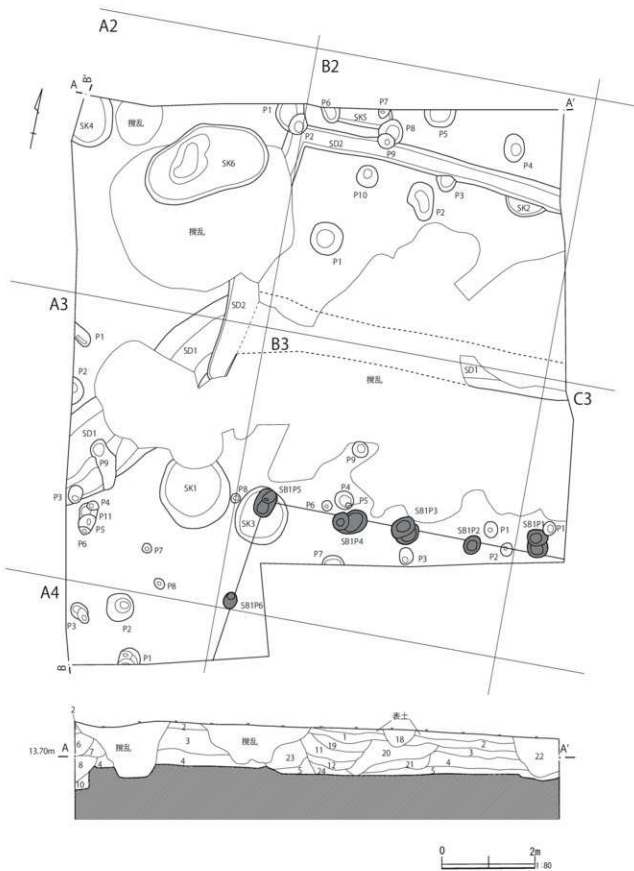
A3グリッドに位置し、第2号溝跡に切られる。北側は切られるが、残存部で長径約0.9m、短径約0.3mを測る。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第9図）

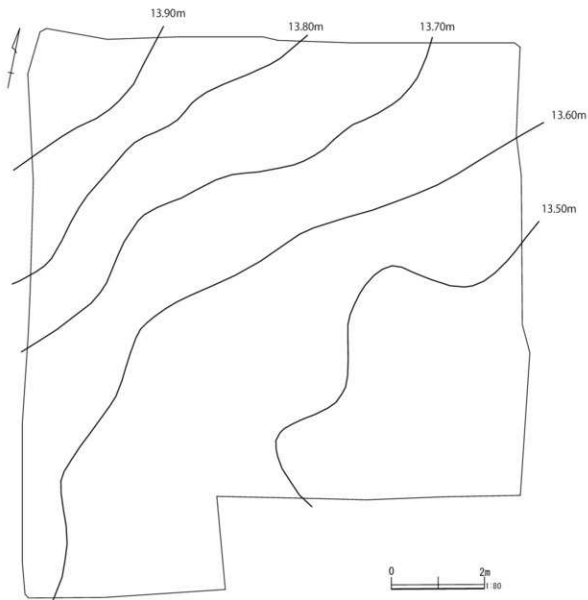
土器 5は破片上部に2組の平行沈線を引き、内部に繊細な刻みを持つ資料である。器面は平滑によく調整される。6は砲弾形の平縁深鉢の口縁部資料である。玉縁となる口縁部に刻みが見られる。7・8は無文の資料で、後者は網代底を持つ平底の底部資料である。

●第3号土坑（第7図）

A3グリッドに位置し、第1号掘立柱建物跡に切られる。平面形は長径約1.2m、短径約1.1mの不整形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。



第3图 第10地点实测图



第5図 調査区地形図

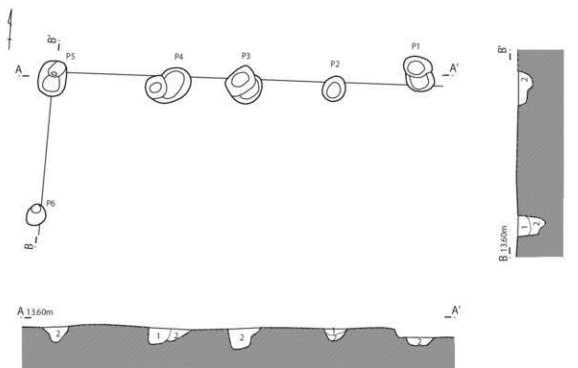
(3) 溝跡

●第1号溝跡 (第8図)

A2・A3・B2・B3・C3グリッドに位置し、第2号溝跡に切られる。調査区内で確認できる部分では、調査区東端から西へ約7.0m延伸し、緩く曲折した後、南西へ約4.4m延伸して調査区外に至る。調査区での最大幅は約2.6mを測り、断面形は逆台形を呈すが、テラス状の張り出しを持つ部分がある。確認面からの最大深は約0.5mを測る。

出土遺物 (第9・39・40図)

土器 第9図19は波状口縁の資料である。波頂下にステッキ状の入組文が看取される。20は横位から斜位の条線文の地文上に弧線の引かれた胴部資料である。21は内湾する砲弾形深鉢で、口縁部に刺突文帯を持つ。粘土紐は貼られない。22は縦位によくなでられた底部資料である。底面には大振りな網代痕が



SB1

- 1 暗褐色土 細まり面 径0.5~2cmのローム粒子や灰褐色ブロックをやや多く、炭化物粒子を少し含む。
 2 暗褐色土 細まり面 径0.5~5cmのローム粒子と黒褐色土ブロック、炭化物粒子を少し含む。
 ※1・2層とも柱抜き取り後の埋戻し土である。

第6図 第1号掘立柱建物跡

第2表 第1号掘立柱建物跡ビット計測表

番号	長径	短径	深さ
1	60	42	15
2	38	36	23
3	56	50	28

番号	長径	短径	深さ
4	74	48	38
5	58	42	29
6	35	32	48

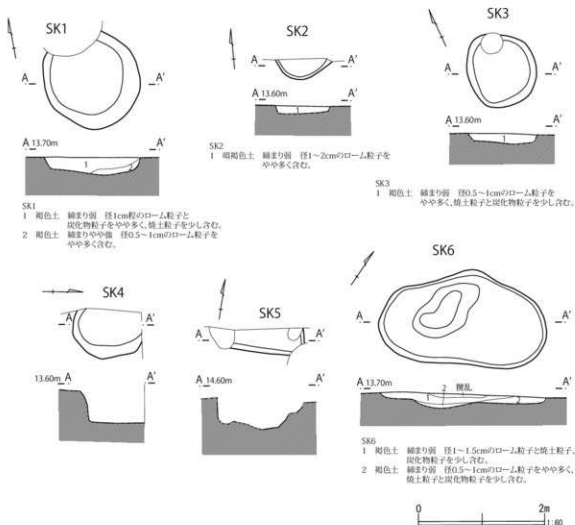
※単位は全てcm

第3表 第10地点ビット計測表

グリッド	番号	長径	短径	深さ
A2	1	(60)	58	7
	2	(45)	38	10
A3	1	(38)	26	27
	2	58	(22)	12
	3	38	32	54
	4	26	20	49
	5	(26)	34	39
	6	(16)	30	30
	7	21	19	14
	8	26	16	15
	9	110	38	61
	10	48	30	30
	11	(46)	40	19
A4	1	(32)	48	25
	2	(58)	58	46
	3	50	30	42
B2	1	72	70	22
	2	78	58	19

※単位は全てcm

グリッド	番号	長径	短径	深さ	
B2	3	(36)	40	23	
	4	59	52	20	
	5	(42)	66	13	
	6	(28)	38	16	
	7	(20)	24	15	
	8	(32)	48	12	
	9	38	30	36	
	10	48	44	22	
	B3	1	32	30	28
		2	26	26	41
3		36	30	39	
4		40	38	22	
5		17	16	37	
6		18	18	9	
7		44	(16)	13	
8		20	20	33	
9		36	30	13	
C3	1	28	26	23	



第7図 第1～6号土坑

認められる。23～25は無文の口縁部資料である。24は輪積痕を明瞭に残すもので、皿形となるものと思われる。25は薄く、器面の荒れの激しいもので、いわゆる製塩土器と思われる。26は無文小型の底部資料である。坏状を呈するが胎土等から縄文時代の所産と思われる。

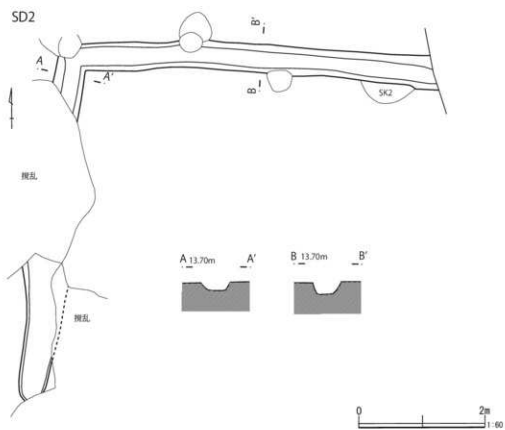
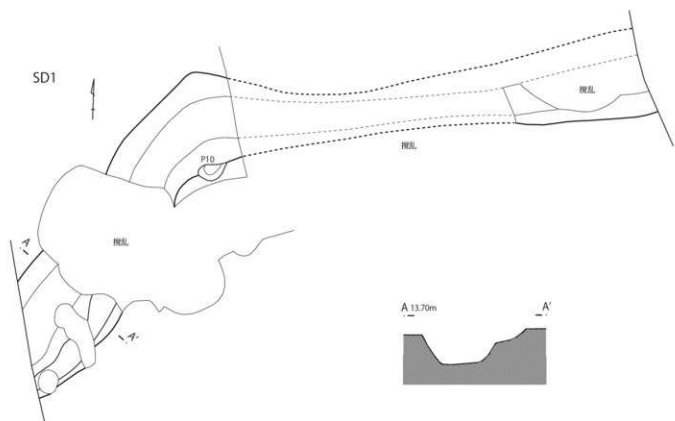
石器 第39図13は砂岩製の磨製石斧刃部残欠である。情報量は少ないが、丁寧に整形されている。第40図5は安山岩製の磨石残欠である。使用は両面に及ぶ。若干の被熱の痕跡を留める。

●第2号溝跡（第8図）

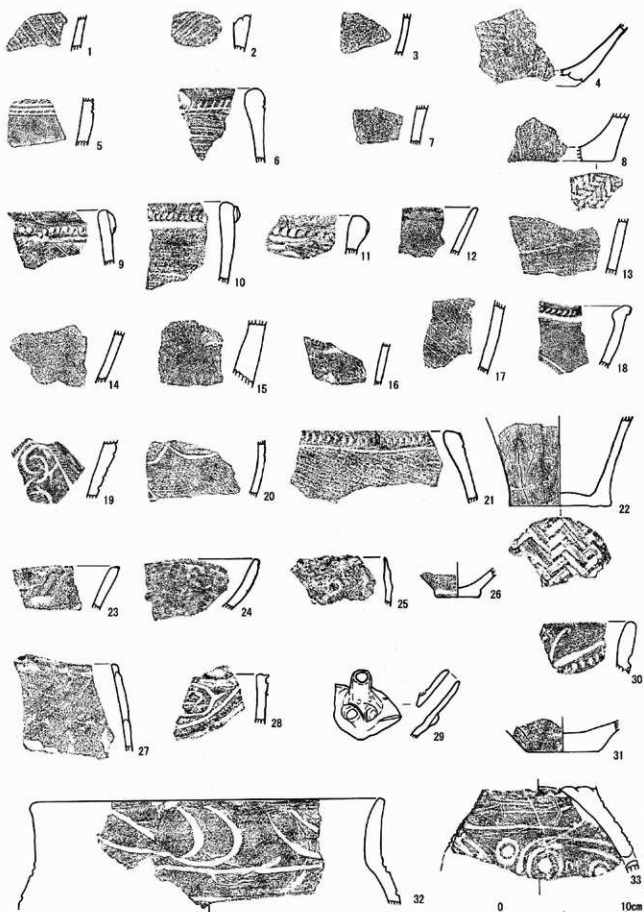
A2・A3・B2グリッドに位置し、第2号土坑と第1号溝跡を切る。調査区内で確認できる部分では、調査区東端から西へ約7.0m延伸し、クランク状に曲折した後、南へ約5.8m延伸する。調査区での最大幅は約0.5mを測り、断面形は逆台形を呈す。確認面からの最大深は約0.2mを測る。

出土遺物（第9・40図）

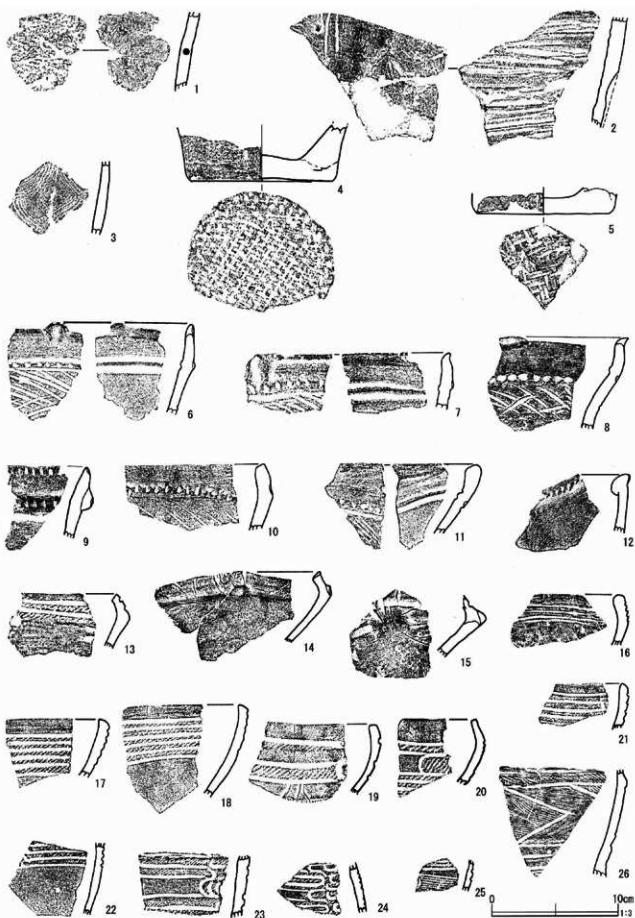
土器 第9図27は内湾傾向を示す無文の深鉢土器の口縁部資料である。輪積痕を残す。28は三叉状入組



第8図 第1・2号溝跡



第9圖 掘立柱建物跡・土坑・溝跡出土遺物



第10図 グリッド出土遺物 (1)

文の施された口縁部資料である。口唇部にも指頭による圧痕が残される。29は注口土器の注口部の資料である。30はわずかに外反する平縁深鉢の口縁部資料である。斜行する沈線と刺突列が観察される。32はレンズ状や三日月状のモチーフの描かれる広口壺である。推定口径は28cmほどと思われる。33は台付土器の脚台部である。いくつかの円窓が確認され、これを玉抱き文風に配するようである。

石器 第40図9は閃緑岩製の砥石と思われる残欠資料である。表裏両面がよく磨れている。また、正面から側縁にかけて3条の線条風の擦痕が認められる。大振りで大振りであるため、手に持って使用することは想定できず、磨石とせず砥石とした。

(4) グリッド出土遺物

縄文土器 (第10～33図)

本地点出土資料をその特徴ごとに分類して述べる。

第1群土器 第10図1が該当する。

外面に単節縄文の観察される繊維土器である。内面は平滑に整形され、器形は深鉢形を呈するものと思われる。縄文時代前期、黒浜式に該当する。

第2群土器 第10図2～5が該当する。

2は外面に垂下する3条の沈線が観察される深鉢土器で、内面には横位の条痕風の整形痕を顕著に残す。3は櫛状施工具による曲線文の施された胴部資料である。胎土に砂粒を含みざらっとした感覚を持つ。4・5は網代痕を明瞭に残す大振りの平底の底部資料である。両者とも、底面円盤からの輪積整形の痕跡を明瞭に残す。縄文時代後期の堀之内式に該当しよう。

第3群土器 第10図6～11図6が該当する。

第10図6～8・10・11はよくなでられた無文の口縁部を持ちこの下端を刺突列で画し、以下に矢羽状となる沈線文帯を形成すると思われる一群である。6・7では口縁部に下開きとなる小突起が付される。11は緩波状縁を呈する可能性がある。9は口唇部にも刺突列を持つもので、矢羽状となる沈線文帯が形成されないもの、12は口唇部に刺突列を持つ振幅の大きな波状縁深鉢と思われる。

13～15は「く」の字に屈曲する幅狭の口縁部文様帯を持つものである。13は2条の単沈線と単節縄文の地文が窺われる。14・15はよくなでられた無文の資料で大きく外反する緩波状縁深鉢と思われる。

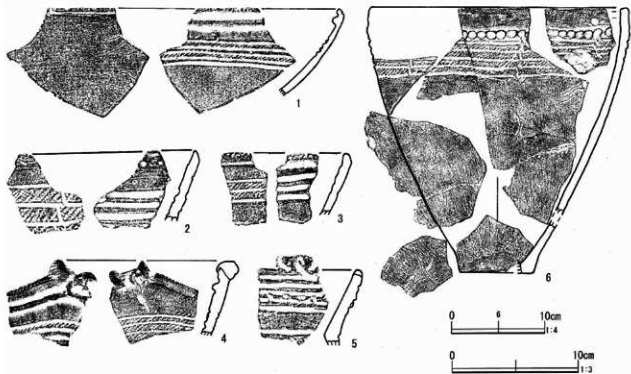
16～21は口縁部に横位の沈線文帯を持つ資料群である。17・18は顕著な外削ぎの口唇部を持つもので、ともに6条の沈線と沈線間の単節縄文が見られるもの、19・20は沈線間に「の」の字状のモチーフなどが配される碗形を呈すると思われる資料である。

22～26は上記の一群の胴部と思われる資料を一括した。24は内傾する瓶形の資料、25は球胴を呈する注口土器の胴部であろう。

第11図1～4は内文を持つ浅鉢若しくは鉢形の資料の口縁部である。1は外面はよく磨かれ、口縁内面に1条の隆帯を巡らせるとともに5条からなる横走沈線帯を持つ。1帯目と3帯目には毛筋彫り状の刻みを持つ。4は波状縁となるもので、波頂部には摘み上げたような耳状の組合せ突起を持つ。

5は頭部で屈曲し外反する口縁部に横走沈線帯を持つ口縁部資料である。口唇部には装飾突起を持ち、突起から下がる沈線は横走沈線帯に合流する。

6は推定口径20.5cm、器高21cmほどと思われる平縁深鉢である。口縁部無文帯と横走沈線帯との間を鎮



第11図 グリッド出土物(2)

状隆帯で画する。胴部以下は丁寧な縦位のなでが加えられる。口唇内面に1条の凹線を持つ。

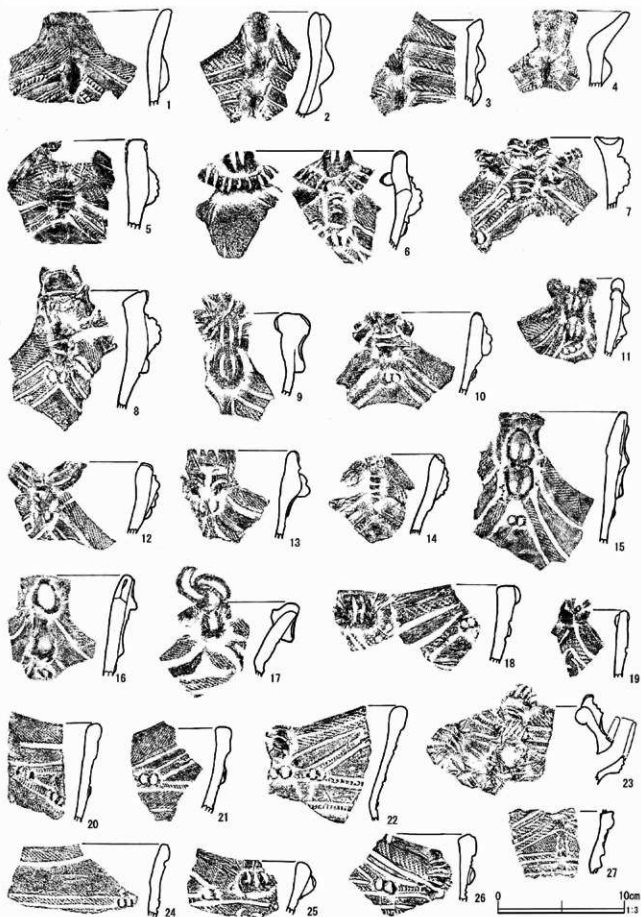
第4群土器 第12図～第19図1～18・27が該当する。本地点出土遺物の中核をなすもので、概ね縄文時代後期の安行Ⅰ式から、晩期の安行Ⅲ a 式に該当し、一部安行Ⅲ b 式段階に下るものを含む。

以下の通り類別してとらえることができる。

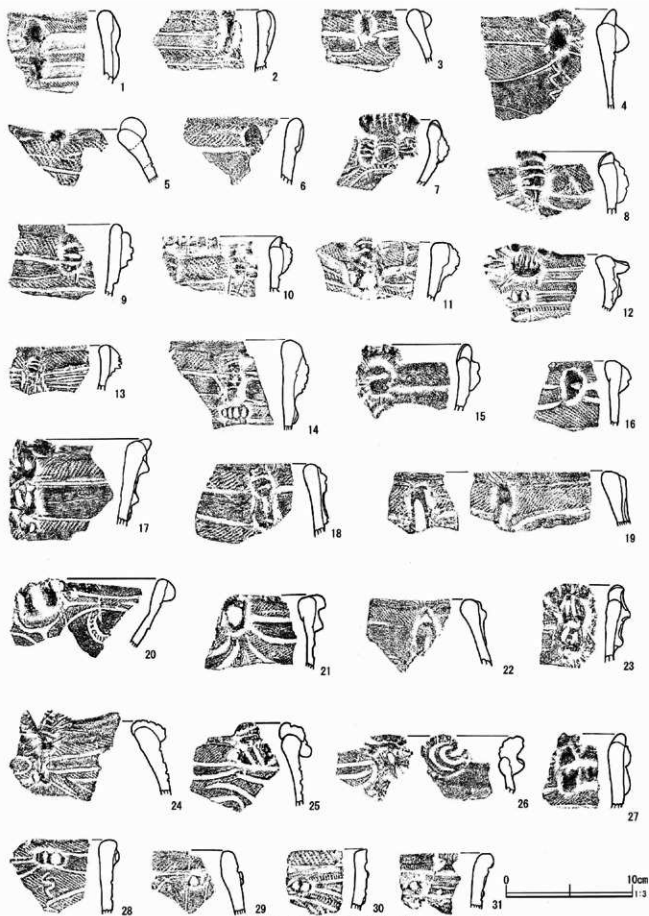
第1類 第12図1～27が該当する。4単位程度の大振幅の波状線をなすもので、口縁部周辺の文様帯に帯縄文を用い要所に貼瘤を配する。波頂部には魚尾状などの特徴的な装飾が施される。1～4は波頂下に配された貼瘤に刻みを持たないもので、1・4では魚尾状の突起にも沈線や刻み等は施されない。5～7・14・23・26では口縁部の帯縄文の下位に展開する文様帯には、斜位に展開する刻みを持つ細い隆帯が観察される。貼瘤は細い沈線で横位に刻まれる。23は注口土器である。安行式の中でも縄文時代後期に属する一群と思われる。

9・11・15などでは波頂下の貼瘤は扁平となり縦位に刻むような刺突が窺われる。17では波頂下に三叉文が見られる。20～22・24・25・27は波底部の資料である。安行式でも縄文時代晩期に位置付けられると思われる一群である。

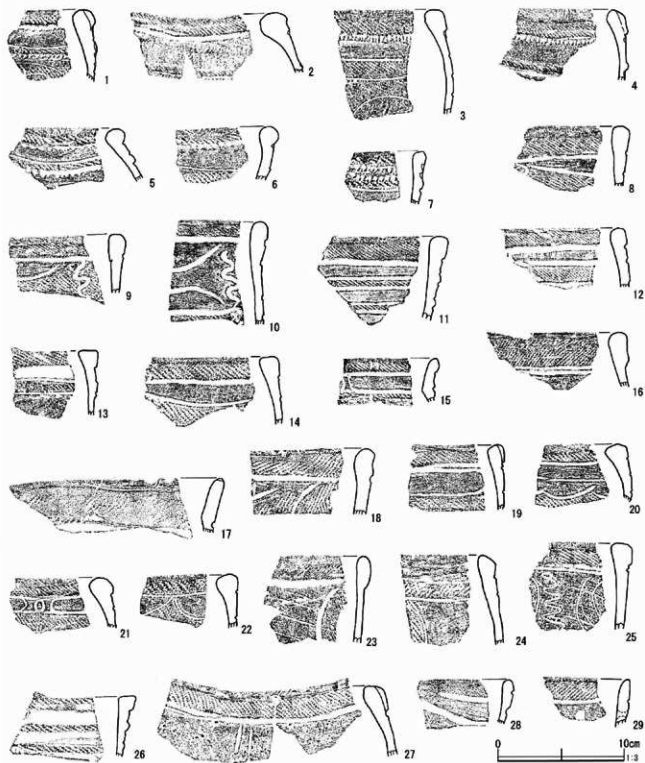
第2類 第13図1～31、第15図1～5・9、第18図25がこれにあたる。平線をなすもので、口縁部周辺の文様帯に帯縄文を用い要所に貼瘤を配する。口縁部に小突起を持つものもある。1～6は口縁部に配された貼瘤に刻みを持たない一群である。4では口縁部に小突起が見られるほか、背合わせの弧線文の間隙に形成された菱形区画内に垂下する蛇行沈線が施される。7～14は貼瘤を細い沈線で刻む特徴を持つ。このうち7・11・12は横位展開する細い隆帯を細かく刻むもので、30・31などとともな後期段階に位置付けら



第12図 グリッド出土遺物 (3)



第13図 グリッド出土遺物 (4)



第14図 グリッド出土遺物 (5)

れるものと思われる。17~19・21・22は扁平な貼瘤の中央にスリット風の縦長の刻みを持つもの、21は貼瘤の中央を篋状施工で押し窪めたものである。20は帯縄文の中に三叉文が施されるもの、25は装飾突起の下に、26では装飾突起に入組弧線文が施されるもので、いずれも晩期段階の安行式の資料であろう。

第15図1は口縁部に帯縄文を施し、縦位の貼瘤を持つ平緑深鉢である。貼瘤は篋状施工を押し当てて窪ませる。貼瘤同士をつなぐように横位に配される沈線間にも口縁部と同じ原体を用いた単節縄文が施される。推定口径23.5cmほどと思われる。2は推定口径12cmほどの小型の土器で、口縁部と双刺瘤の貼られた部位と破片下端に沈線で区画された縄文帯を持つが、磨消文帯との境は極めて不明瞭で、磨消文帯にも縄文が残され、縄文帯にも縄文が施されない部分がある。3は内湾傾向の強い資料で、口縁部に縦長の貼瘤を持つ。貼瘤は中央部にわずかにスリット状の刻みを持つ。推定口径は24cmを測る。4は口縁部に小突起を持つ外反する平緑深鉢である。口縁部と頸部の帯縄文の間に、入組弧線区画を設けるもので、区画の接点に双刺瘤を配するものと思われる。推定口径は、約22cmと思われる。5は魚尾状把手風の刻みを持つ貼瘤と縦長で中央にスリット風の刻みを持つ貼瘤が合体したような装飾を持つ。この貼瘤間を太目の弧線で結び磨消文帯としている。磨消文帯をとってしまえばあたかも魚尾状把手を持つ波状緑土器が出来上がるように作られている。貼瘤間の弧線文を上端区画とした縄文帯は下開きの弧線と融合するように構成され、貼瘤の下には三叉文が描出される。推定口径は25cmを測る。9は砲弾形を呈する深鉢形土器と思われ、口縁部に3帯の帯縄文を配し、3帯の同じ位置に貼瘤が付される。帯縄文間には、6条からなる横走沈線帯が設けられ、貼瘤の位置で縦位の弧状沈線で閉じられる。推定口径は27cmほどである。

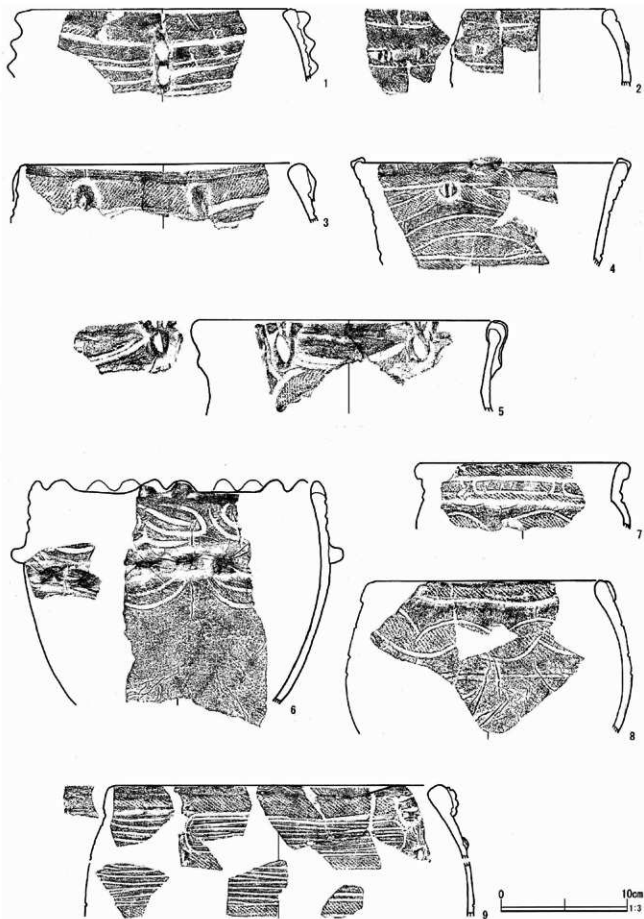
第18図25は推定口径15cm、推定器高18cmほどの注口土器である。口縁部と胴部最大径の下部に帯縄文を配し、この間を文様帯とする。口縁部には装飾突起が配されるが単位数は不明である。注口の付される位置にやや弧状となる2帯の縄文帯を形成し、これを結ぶように縦長の刻みを持つ貼瘤が付される。この貼瘤と口縁部の突起とは連動しない。この縄文帯と口縁部の帯縄文との間には横位に展開するステッキ状の入組文が配される。胴下半から底部に向けては単節縄文が施されるものである。

第3類 第14図1~29、第15図の7・8がこれにあたる。平緑となる口縁部文様帯に貼瘤を持たない、あるいは貼瘤以外の部位の破片資料である。

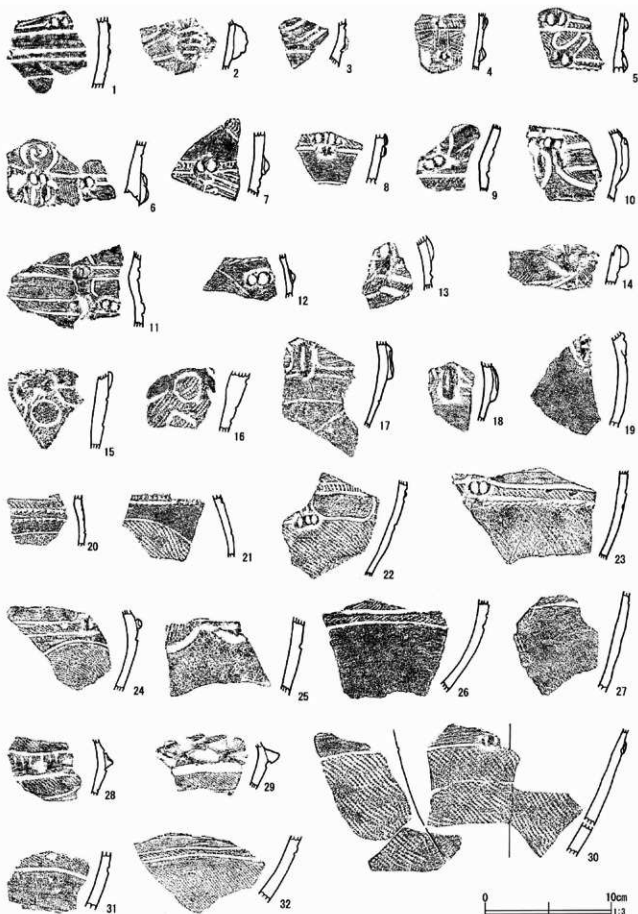
1~7は帯縄文の下端区画などに刺突文列を用いるものである。8~10・25は垂下する蛇行沈線の看取される資料である。15・21は磨消文帯に円文などを配す資料、20・22は磨消となる弧線区画を持つものである。このほか、17は口唇部の要所に刻みが付されるもの、29では補修孔が穿たれる。

第15図7は球胴を持ち、口縁部が直立する広口壺風の器形を呈するもので、口縁部と頸部に帯縄文を持つ。帯縄文間は弧状の短沈線で結ばれる。胴部には縄文の充填された弧線区画が配されるようである。推定口径は17cmほどと思われる。8は胴部の張る砲弾形の深鉢で、口縁部に帯縄文を持つ。胴部に単沈線を配し口縁部文様帯を閉じる。文様帯内には縄文の充填される入組弧線文が施される。推定口径は20cmほどと思われる。

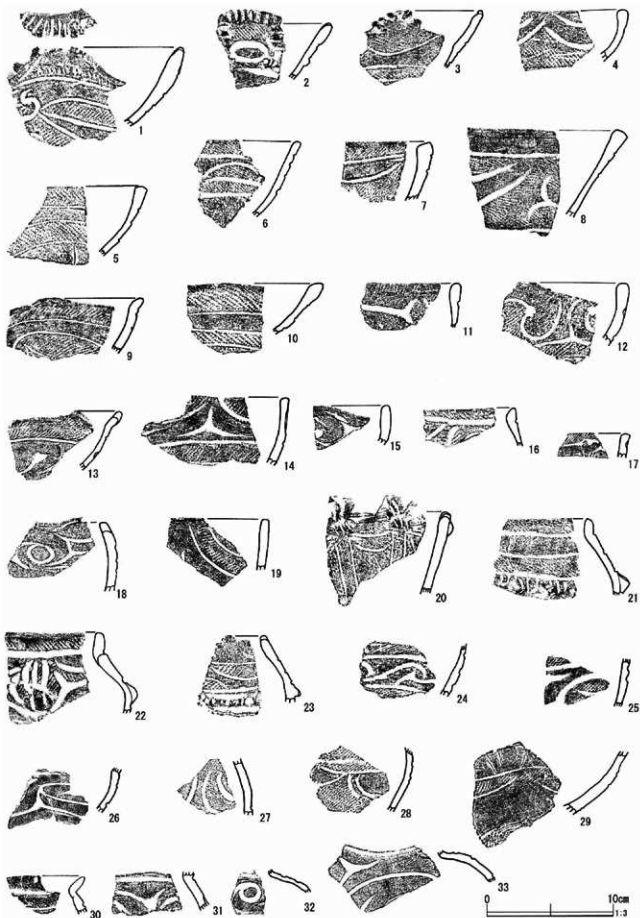
第4類 第16図1~32が該当する。第1類~第3類の胴部に該当するものを一括した。1~3は細い粘土紐隆帯上に毛筋彫り風の緻密な刻みを持つものである。4~7・22では、平行沈線間に刻みを持つものである。8~11・13・17・23・24では沈線間に縄文を充填する縄文帯が施され、要所に双刺瘤を持つ。15・16では縄文の充填される円文が観察される。18・19は縦長の貼瘤を持つもの、20・21は縄文帯の縁取りを刺突列で行うものである。28・29は横長の貼瘤を持つもの、30は胴部に設けられた磨消文帯以下に間断なく単



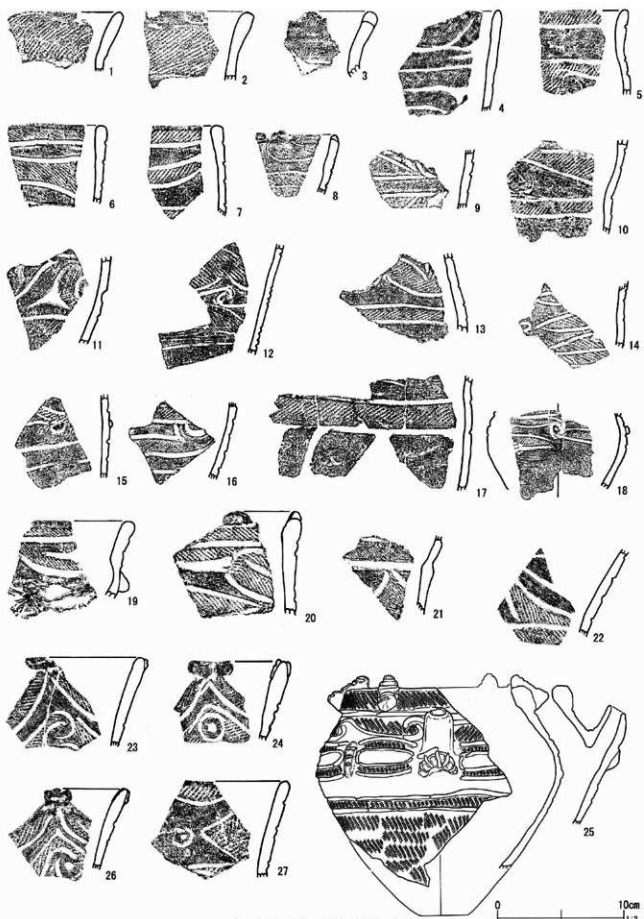
第15図 グリッド出土遺物 (6)



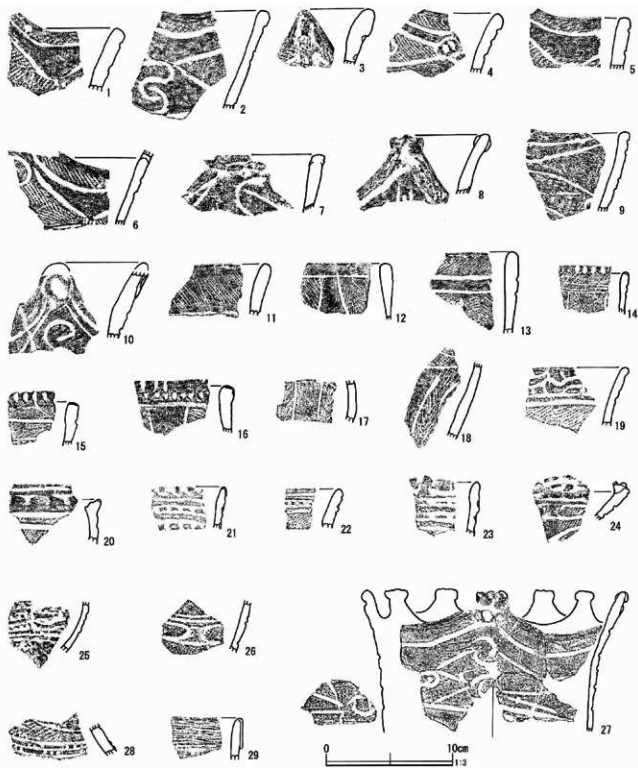
第16図 グリッド出土遺物 (7)



第17図 グリッド出土遺物 (8)



第18図 グリッド出土遺物 (9)



第19図 グリッド出土遺物 (10)

節縄文を施した資料である。残存部最大径は19cmを測る。

第5類 第17図1~33が該当する。安行式土器のうち縄文時代晩期に位置付けられる一群で、浅鉢及び皿形、小型の壺形の一括した。1~3・9・12・13・15は緩波状縁となる浅鉢で、1~3・9では口唇部に小突起を持つ。1では、横位展開するレンズ状の縄文帯や垂下する蛇行沈線が、13・15では三叉文が見られる。4~8・10~12・14・17・19は平縁の浅鉢形土器である。4・14・19では「八」の字に開く縄文帯や磨消文帯が施されるもので、4・19では隙間に三叉文が配される。20は、いわゆる角皿、21~23は算盤玉状となるものであろう。24~26・30~33は小型の壺形土器と思われ、三叉状入組文の施されるもの、31~33は三叉状入組文が窺われる。

第6類 第18図1~14・17が該当する。縄文帯の隙間に三叉文を配置したり、ステッキ状の入組文を描出する一群を一括した。1~3は口縁部に2指程度の外傾する縄文帯を持つものである。3では小突起が付される。4は緩波状縁を呈するもので、三叉文が配される。5・10・12はステッキ状の入組文の施された資料である。

第7類 第18図15・16・18が該当する。南東北の瘤付文系譜の一群である。15・18では沈線の結節点に円形の小型貼瘤が付される。後者は、推定胴径11cmほどの球胴の資料で、階段状に横位展開するレンズ状の縄文帯の結節点に貼瘤が付される。

第8類 第18図19~22が該当する。縄文帯に貫入するように太い沈線を引き「の」の字状などのモチーフを描出するもので、東関東の前浦式系譜の一群を一括した。19は口縁部の縄文帯の中に三叉文を描くもの、20は「の」の字状もしくは、三叉状入組文の施されたものである。

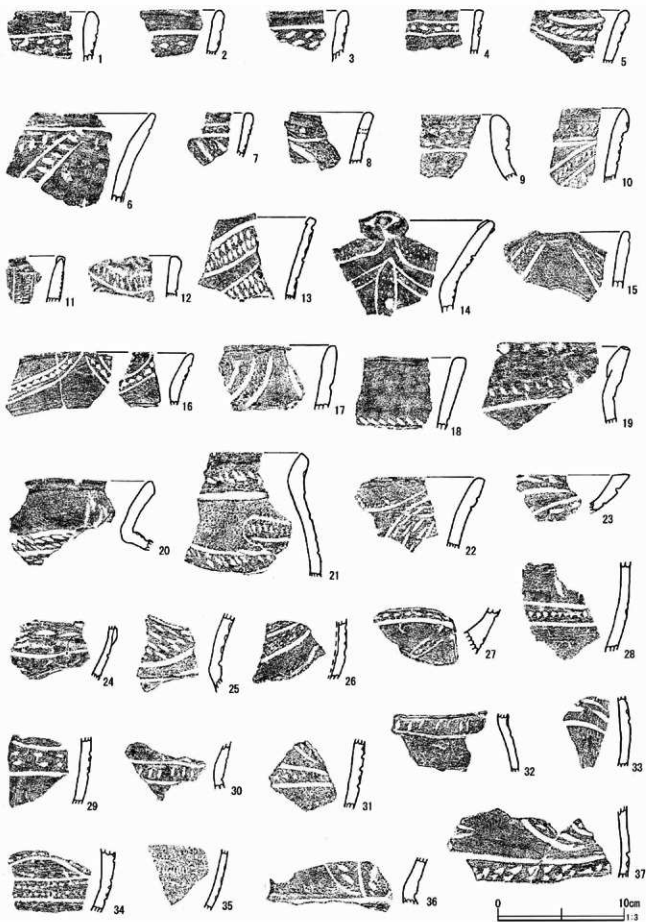
第9類 第18図23・24・26・27、第19図1~10・27が該当する。単沈線で縄文帯と磨消文帯とを区画する波状縁深鉢の一群で、東関東の姥山Ⅱ式の系譜に連なるものである。第18図23・24・26、第19図10・27では、波状縁に合わせて形成される菱形区画に入組線文や円文を配置するものである。第18図27や第19図4は、その波底部の資料であらう。第19図10では、縄文に代わり細密沈線が充填される。

第10類 第19図11~18が該当する。いわゆる細密沈線文の一群である。第19図14~16では口唇部に刺突を伴う。

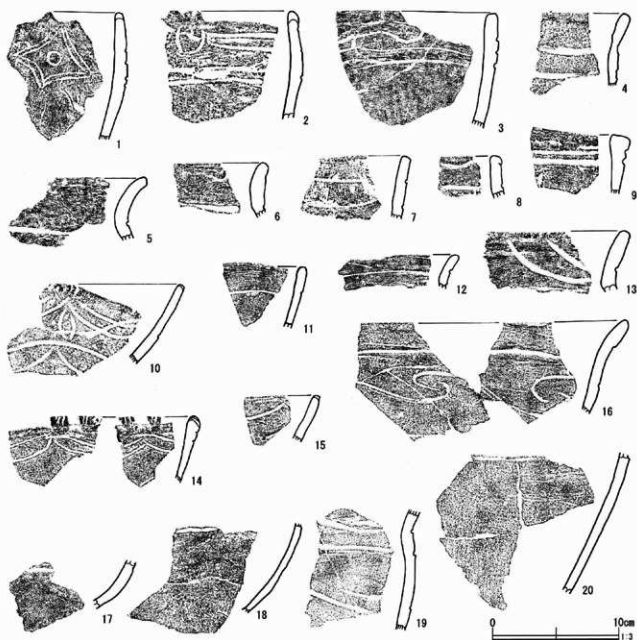
第11類 第19図19~26・28・29が該当する。東北地方の大洞式系譜の一群を一括した。第19図19~25では、半内彫りの羊歯状文などが描出されるものである。24は算盤玉状に胴部の屈曲するもので、注口土器であると思われる。28は半内彫りの横走沈線に相互の刺突を加えたものである。29は折返し口縁に横位の燃糸文の施された粗製の一群である。

第5群土器 第4群とともに本調査区の中核をなす一群で、第20図~第22図が該当する。沈線区画に縄文の代わりに刺突文が充填されたり、沈線だけで文様が描出されたりする。概ね縄文時代晩期の安行Ⅲb式に比定できる。

第1類 第20図及び第22図1・4・6が該当する。第20図1~4・7は口縁部に無文帯を置きその下に横走する刺突文帯が観察される平縁土器である。第20図8~10・21は口縁部が刺突文帯となる例である。21では階段状の入組文が構成される。6~8・10などでは、斜行する刺突文帯も窺われる。11は口縁部から垂下する刺突文帯が、12は口縁部の山形の突起の下に弧状の刺突文帯が施されるものである。14は波頂部に鉢巻状の粘土紐を巻く大振幅の波状縁土器、15は頂部の平坦な緩波状縁土器である。5・16・17は平縁の口縁部に上向きに弧線文が描かれる。18・19はやや外反する広口壺と思われ、頸部に引かれた1条の沈線



第20図 グリッド出土遺物 (11)



第21図 グリッド出土遺物 (12)

の上に刺突列が施される。後者では、口唇部にも浅い指頭圧痕が見られる。20は小型の壺型土器で、頭部の括れ部直下に刺突文帯が置かれる。22は上向きや斜行する刺突文帯が見られる平縁土器、23は皿形土器である。24~37は上記の土器群の胴部の資料である。24・25などのような紡錘形の刺突から26・24などのような円形刺突風のもの、30・32などのような刺し切り風のものまで様々な刺突が用いられる。

第22図1は推定口径20cmほどを測る皿形土器で、口唇部に小突起を持つ。胴部には、レンズ状の刺突文帯が鋸歯状に施され、丸底となる底部との間を横位展開の刺突文帯で区画する。4は推定口径28cm、器高22cmほどの台付鉢である。口唇部には刺突を施し漣状とする。口縁部には、レンズ状の刺突文帯が鋸

歯状に施され、底部との間を横位展開の刺突文帯で区画する。脚台部にも沈線によるレンズ状のモチーフが描かれるが、刺突は充填されない。外へ広がる裾部との境には横位展開の刺突文帯が観察される。6は推定口径28cmほどの台付鉢である。口縁部には、上向きの三日月形の刺突文帯が連ねられる。底部との境には、横位展開の沈線2条が観察されるが、刺突文は充填されない。肉厚だが、洗練された胎土を使い、丁寧に作られている。

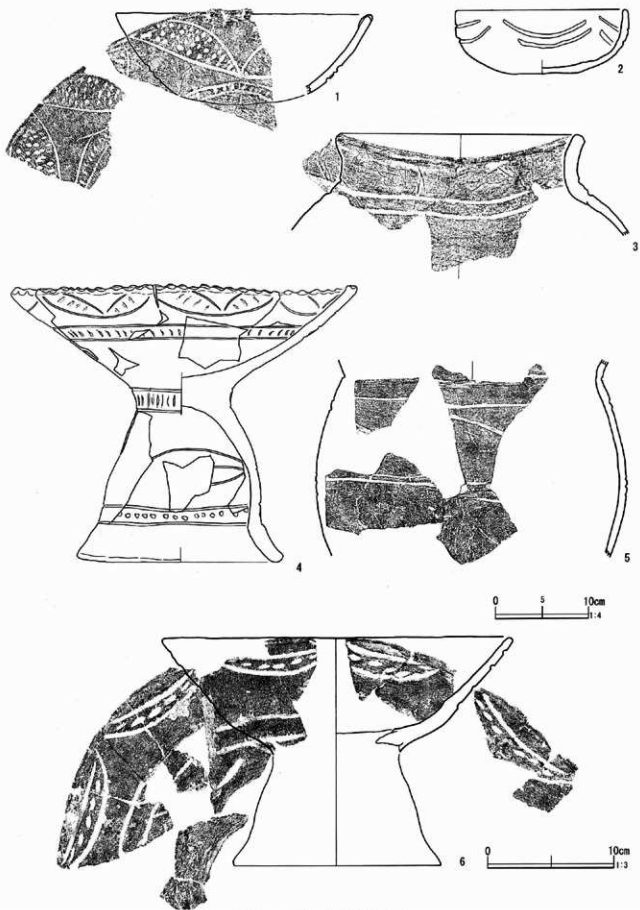
第2類 第21図、第22図2・3・5が該当する。レンズ状や三日月状などの沈線でモチーフが描かれる一群である。第21図1は小突起を持つ平縁土器で、突起下に2条1組の沈線で菱形のモチーフが描かれ、中央に円形刺突が施されたものである。2も小突起を持つ平縁土器で、突起下に「U」字状のモチーフが置かれ、その両側に横長の沈線区画が展開し、この文様帯の下端を2条1組の沈線で閉じるというものである。4～9・11・12は平縁の口縁部に横位展開の沈線が引かれたもので、5・6・8・11では1条、それ以外では、間隔の広狭はあれ2条の沈線が引かれる。10は、緩波状線をなす浅鉢形土器で、波頂部から振り分けられたように2条1組の弧状沈線が引かれ、波頂下には楕円文が配される。底部との間に引かれた1条の横走沈線の下に弧状沈線を連ねレンズ状の区画を設けている。13・15は口縁部に2条の弧線を引くもので、前者は広口壺であろう。14は小型の鉢形土器と思われ、2個1組の刻みのある突起を起点に、振り分けられたように2条1組の弧状沈線が引かれるものである。16はステッキ状の入組文が施されたものである。17～20は胴部資料で、17・18は文様帯下端区画の沈線が窺われる浅鉢、20は同様の深鉢である。19は頸部から胴部にかけての資料と思われ、胴部上半にも上開きの弧線文が窺われる。

第22図2は口径13.5cm、器高4.0cmほどの皿形土器である。平縁で、口縁部に2条1組の沈線で上開きの弧線文が連ねられる。底部は平底となる。3は推定口径20cmほどの壺型土器で、頸部に2条1組の沈線が巡る。5は球胴となる深鉢で、括れ部の下に横走する沈線帯を持つほか、胴部最大径付近にも幅の狭い沈線帯を持つ。この間には、斜行する沈線が見られる。残存部からは明確なモチーフは不明であるが、同様の器形のものでは、ステッキ状の入組文が施されたものも散見され、こうした一群と思われる。

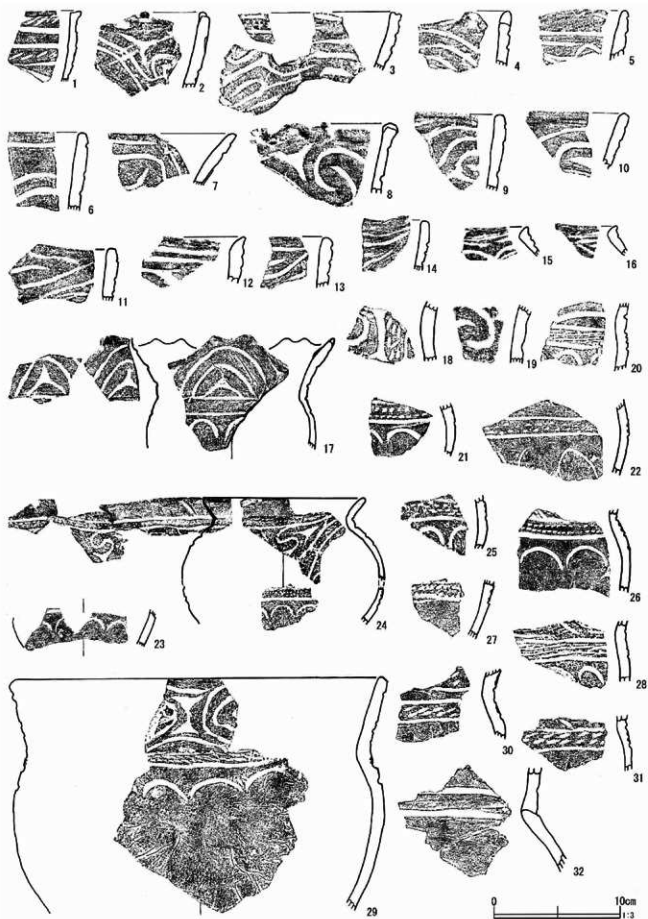
第6群土器 第23図の資料が該当する。比較的太い沈線で三叉状入組文を中心とするモチーフを描く一群で、概ね縄文時代晩期の安行ⅢcからⅢd式に該当する一群である。

第1類 第23図1・2・18・24・30が該当する。入組文を構成する沈線帯の内部やこれに沿って刺突が施された一群である。1では三叉状入組文の上部に構成された2帯に斜位の刺し切るような刺突が施される。2では緩波状となる波頂下におかれた三叉文を囲む入組文が刺突文帯で構成される。24は推定口径13cm、胴径16cmほどと思われる平縁の小壺で、三叉状入組文を囲む区画帯に刺突が施される。

第2類 第23図3～17・29が該当する。主に三叉状入組文及びこれを構成すると思われる沈線文の窺われる一群である。7は大きく外反する浅鉢と思われ、波頂下におかれる三叉文を囲む沈線帯が看取される。8は口唇部に付された突起下に配された三叉文とこれを取り巻く入組弧線文が窺われる。9～12は三叉状入組文の施されるものである。17は推定口径16cmほどの小型の深鉢で、4単位の双頭の波状線となるものと思われる。波頂下と波底部に三叉文が配され、これを囲むように下向きの弧線区画が引かれる。括れ部に口縁部文様帯の下端を区画する2条1組の沈線が引かれ、胴部には連弧文が窺われる。29は推定口径30cmを測るとと思われる深鉢で、平縁をなす口縁部には、頂点を合わせた上下1組の三叉文とその両側に弧線文が施されるようである。この文様帯の下端は括れ部におかれた刺突文帯で閉じ、その下に下向きの連弧文が施されるものである。



第22図 グリッド出土遺物 (13)



第23図 グリッド出土遺物 (14)

第3類 第23図19～23・25～28・31・32が該当する。上記の類例の胴部下半の資料を一括した。文様帯下端区画となる刺突文帯とその下に展開する連弧文が看取される一群である。23は残存胴径12cmほどの小型の資料である。27・31では連弧文がないか連弧文上部の破片である。32は刺突文帯が沈線文帯となるが、本類に属するものであろう。

第7群土器 第24図～第27図の資料が該当する。縄文時代後期から晩期にかけての安行式諸型式に伴う粗製土器の一群を一括した。

第1類 第24図1～17、第27図2・3が該当する。口縁部がわずかに内湾する平縁の砲弾形を呈する深鉢形土器である。口縁外縁と頸部に横走る刺突文列を持つ。口縁部の刺突文列はその下端を1条の沈線で区画することが多い。刺突は、篋状施工具を用いたもので、三角形の刺し切るようなものが目立ち、押し引きとなるものも散見される。地文は、斜行する条線文で、口縁部から底部付近に及ぶ場合が多い。16・17では刺突が施されない。また、17では口縁部文様帯にわずかに湾曲する梯子状の刺突文帯が観察される。

第27図2は推定口径18cmを測るもので、口縁部の内湾傾向の強いものである。口縁部、頸部とも刺突文列には区画沈線を伴わない。口縁部文様帯には蛇行沈線が施される。3は推定口径23cmを測るもので、口縁部、頸部の刺突文帯は沈線によって区画される。

第2類 第24図18～28、第25図1～23、第27図1・4・5が該当する。第1類と共通する器形を持つ。口縁部及び頸部の刺突文帯は粘土紐を貼り付け、刺突は粘土紐を引きずりながら施すものが増加する。特に口縁部は隆帯を貼り肥厚させる傾向が強くなる。また、口縁部文様帯内に様々な付加文を施す事例が増加する。18では矢羽状沈線、22では縦位のレンズ状文、23ではさらに蛇行沈線が看取される。25・26では刺し切り状の刺突を伴う縦位刺突文帯が形成される。第25図3では、口縁部を巡る刺突隆帯が文様帯内に入り込む様子が窺われる。また、13・14のように縦位のレンズ状文を施し地文を磨り消したり、20～23のように磨消縄文を取り入れる事例も見られる。

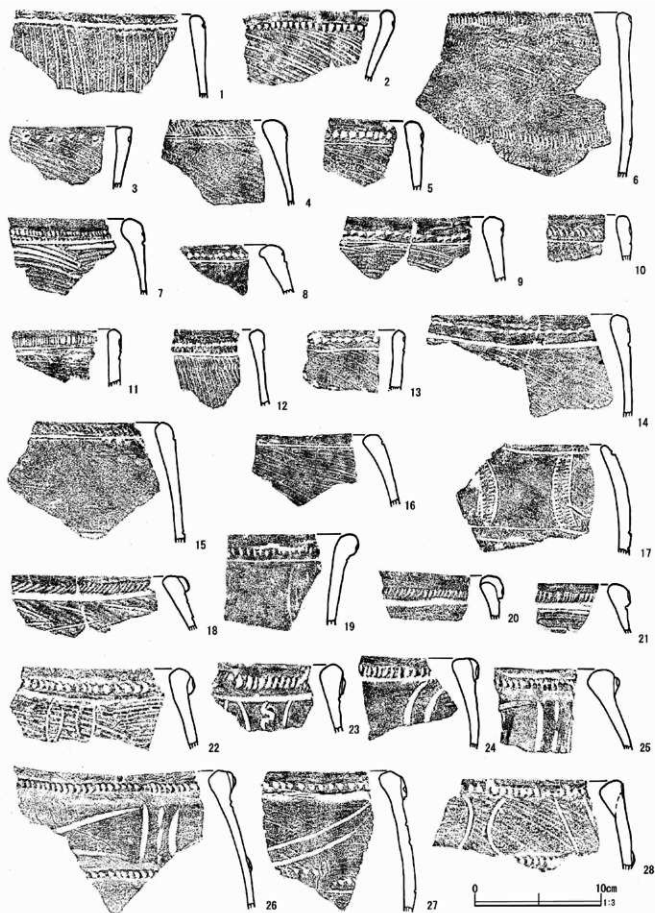
第27図1は推定口径20cmほどの砲弾形の平縁深鉢である。口縁部には粘土紐を貼り連続刺突を施すが、頸部は縄文帯で区画し口縁部文様帯内は沈線で縁どられた弧状の縄文帯とこれと融合した三叉文が施される。いわゆる半粗製土器である。4は推定口径22cmほどの砲弾形の平縁深鉢である。5とともに、口縁部と頸部に刺突を伴う隆帯を持つ典型的事例である。

第3類 第26図が該当する。第1類・第2類の胴部資料を一括した。3～7は頸部刺突文帯に隆帯を伴わないもので、第1類の胴部資料であろう。8～13は反対に隆帯を伴う頸部刺突文帯を持つことから第2類に帰属する可能性が高い。14～21は胴下半の条線文の一群である。

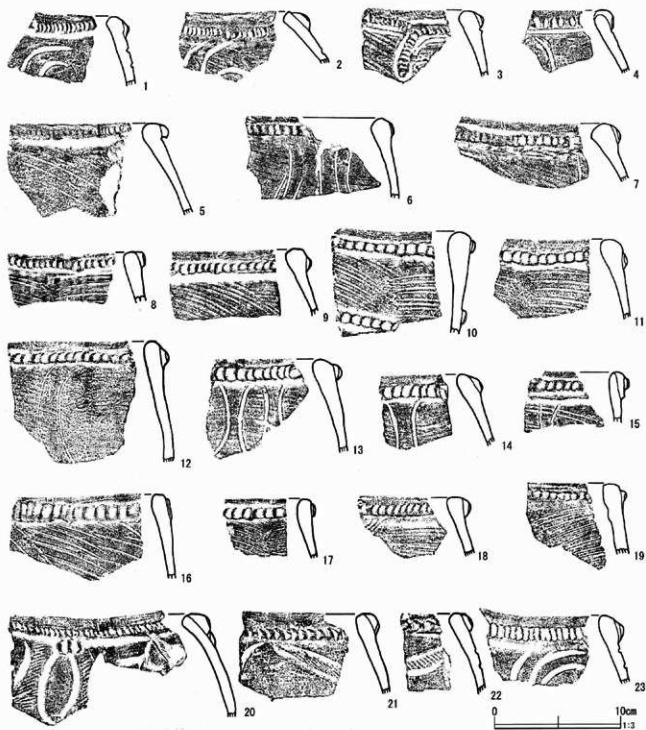
第8群土器 第28図～第30図に掲載した資料が該当する。縄文時代後期から晩期にかけての安行式諸型式に伴う無文の土器群を一括した。

第1類 第28図1・2が該当する。口縁部に貼瘤や小突起を持つものである。1は緩波状縁を呈する外反傾向のある深鉢で、波底部に山形の小突起を複数持つ。2は直立する口縁部に「C」字状の貼瘤を持つ平縁土器である。

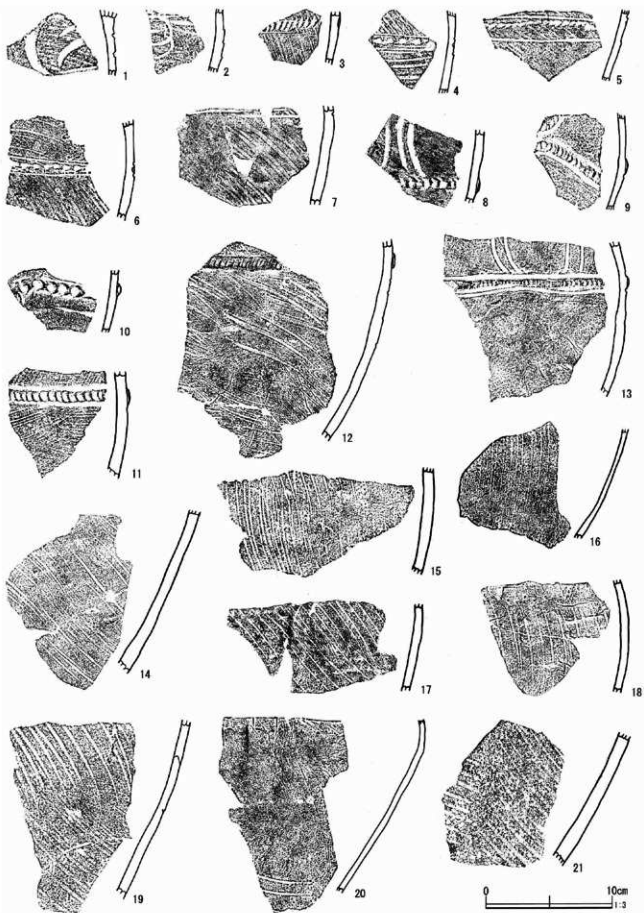
第2類 第28図3～5・10、第30図19～21が該当する。口縁部が直立から外反する広口壺となる一群である。第28図3・4、第30図20では、頸部にしっかりとした屈曲を持ち「く」の字に外反する口縁部を持つ。20は推定口径14cmほどを測る。第20図10は緩やかに内湾して立ち上がった口縁部が、薄く作られた口唇部に至って外反するように見えるが、口縁部内面には、粘土帯を足した痕跡を留めており、明らかな外反



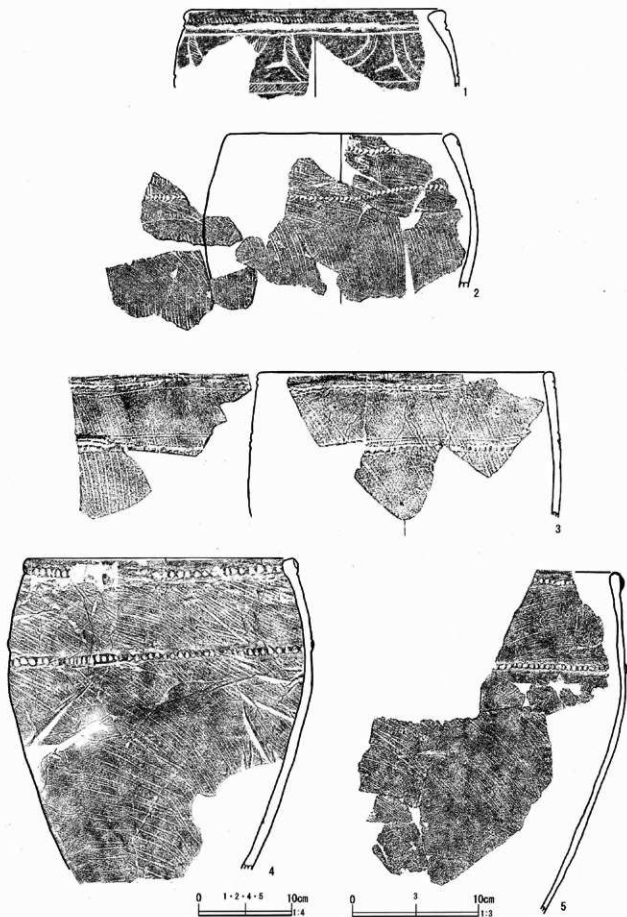
第24図 グリッド出土遺物 (15)



第25図 グリッド出土遺物 (16)



第26図 グリッド出土遺物 (17)



第27図 グリッド出土遺物 (18)

の意図を見ることができる。第30図19は口縁部を欠くが、屈曲する頸部まで残存しており、本類土器であると推定できる。胴部最大径は、17cmほどを測る。20は、推定口径24cm、肩部にある最大径は27cmを測る平縁の壺形土器で、口縁部はほぼ直立する。口縁部から肩部にかけては比較的丁寧な横なでが、胴部は縦なでが観察できる。

第3類 第28図11・12が該当する。無文の皿形土器である。11は口唇部を角頭状に整形したもので、丁寧なで調整が施される。12はわずかながら内湾傾向を示す小型の資料で、指頭による押さえながらの整形痕が見られる。

第4類 第30図22で、内径する筒形の口縁部資料で、破片下端に沈線の痕跡を留める。推定口径は6cm、注口土器の口縁部である可能性がある。

第5類 第28図13～18・22～33である。口縁部が直立から内湾傾向を示す平縁の深鉢で、器面はなでや削りなどの整形を施すが、輪積痕を顕著に残す一群である。

第6類 第29図1～9が該当する。第5類同様、口縁部が直立から内湾傾向を示す平縁の深鉢で、折り返し口縁を持つことを特徴とする。折り返し口縁には、指頭圧痕を意図的に残し連続刺突風に見せるものも多い。また8・9のように輪積痕を顕著に残すものも見られ、第5類との密接な関係が窺われる。

第7類 第28図19～21で、なでや削りを施し極めて薄く仕上げられたものである。口唇部は内削ぎ、外削ぎなど斉一性は認めにくい、篋状工具で切ったようなシャープな成形である点は共通する。

第8類 第29図10～24で、第7類同様極めて薄く仕上げられた一群で、被熱し剥落したりはじけたりしており、いわゆる製塩土器と思われる。第7類との関連も深いと考えられる。

第9類 第29図25～31、第30図1～18が該当する。無文の胴部資料を一括した。第8群だけでなく、その他の土器群の胴部下半など無文部を含む可能性が高い。第29図25・29や第30図6・9などは輪積痕を顕著に残すもので、第5類の胴部資料である可能性がある。

第9群土器 第31図～第33図に掲載された資料が該当する。本調査地点から出土した、底部、脚台部を一括した。

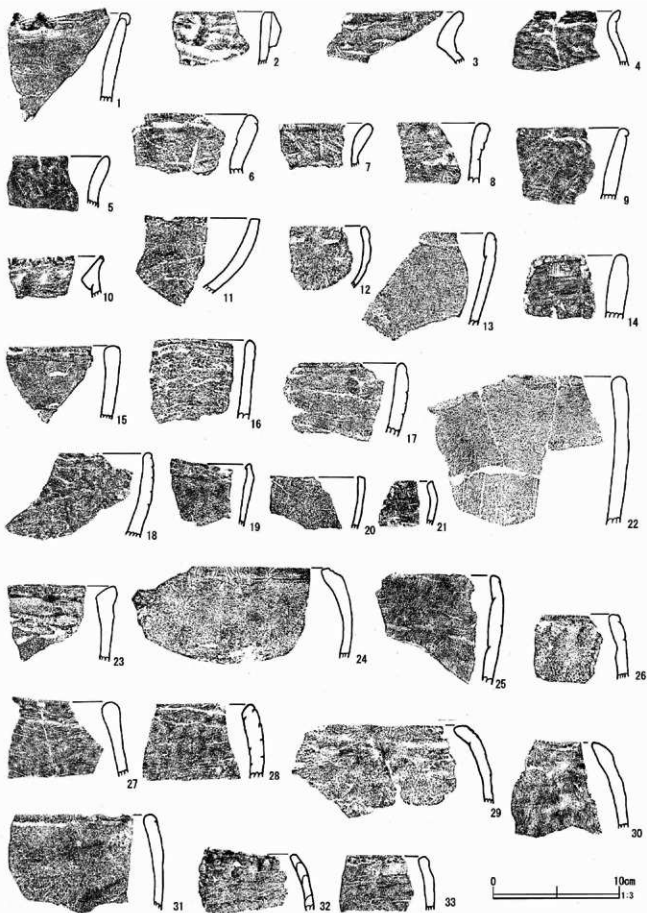
第1類 第31図1～12、第2群、第3群など縄文後期中葉に帰属する可能性が高い一群である。5～11では網代痕が観察される。

第2類 第31図13～20、第32図1～10が該当する。縄文時代後期から晩期にかけての安行式各土器群の底部と思われる一群である。第31図16・18などのように無文となるものもあるが、多くは斜行する条線文が施される。第32図10では、弧線文の下端と思われる沈線が窺われる。

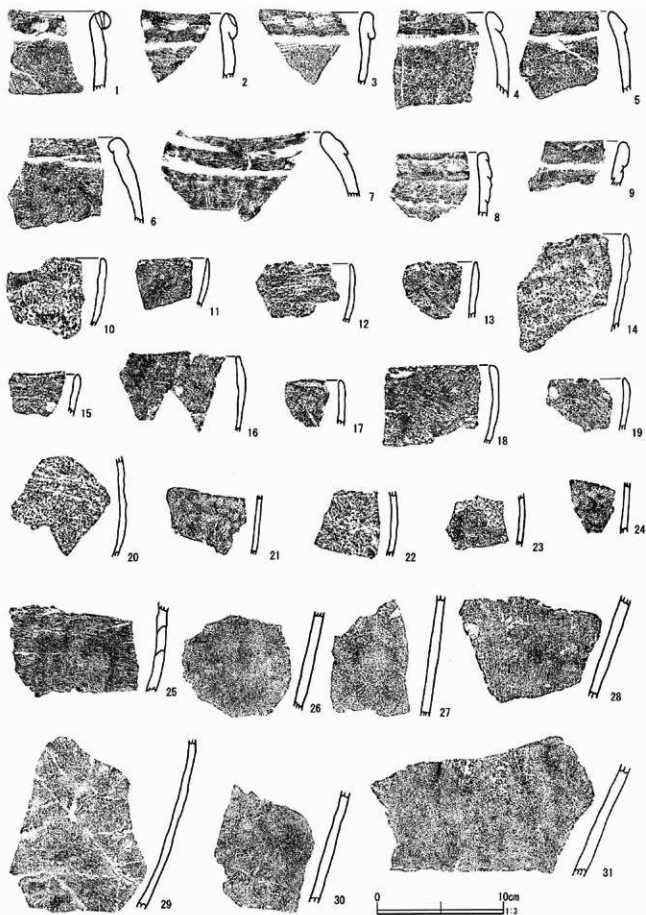
第3類 第32図13・14が該当する。小型の土器であるが、ミニチュア土器とまで言い切れない。13は、口径7.5cm、器高6.7cmを測り、内外ともしっかり整形されている。14は、最大径6cm余りで、器高はさらに高かった可能性もある。

第4類 第32図15～25が該当する。皿または浅鉢の底部資料を一括した。15は、平底で大きく外反する資料で内外とも丁寧に整形されている。第3群に該当する可能性が高い。16・17・20・25は底面周辺に沈線を巡らせるものである。25では単節縄文が施される。19は底面にも縄文や磨消文の施されたもの、22・23はいわゆる角皿の底部である。

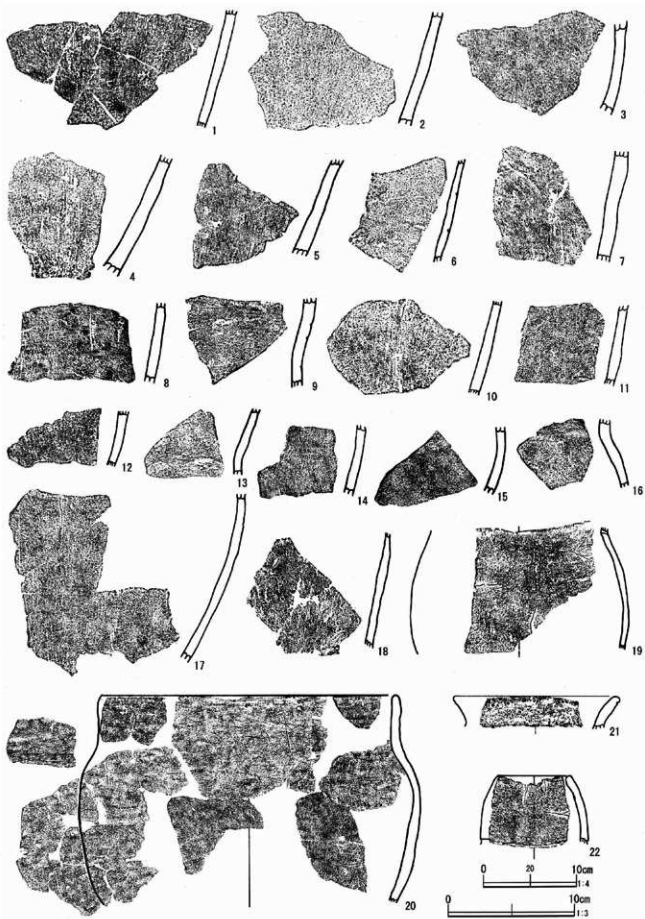
第5類 第33図1～12が該当する。底径が5cmを切る小型の底部を一括した。5は上げ底となるもの、9は底径3cmに満たないが網代痕を持つ。11は底面円盤のみの資料、12は木葉底の資料である。



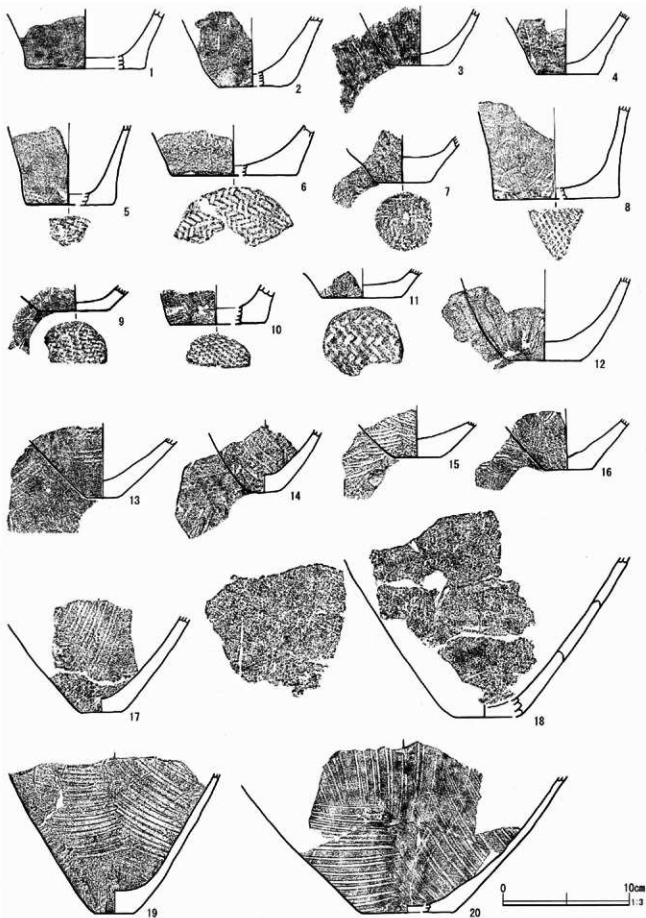
第28図 グリッド出土遺物 (19)



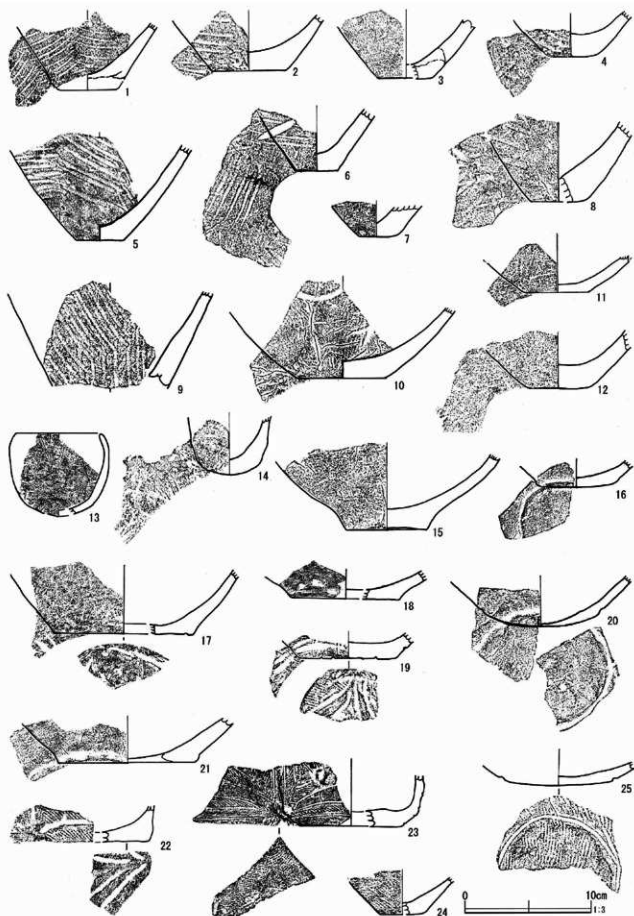
第29図 グリッド出土遺物 (20)



第30図 グリッド出土遺物 (21)



第31図 グリッド出土遺物 (22)



第32図 グリッド出土遺物 (23)

第6類 第33図13～34がこれにあたる。主に晩期安行諸型式に伴う台付鉢の脚台部である。13は横長のスリット風の短沈線が連なる鉢底部資料、14・18は細かな連続刺突の連なる鉢底部資料である。17はレンズ状のモチーフの施されたもの、19は貫通孔を囲む円文を沈線で連結するもの、22・23は連弧文の窺われる脚端部、24は集合沈線の引かれる脚端部である。29・33は帯縄文の窺われる資料である。

土製品 (第34～36図)

土製円盤 (第34図1～30)

土器片の周囲を打ち欠いたり磨いたりして円形から楕円形に整形したものである。1・3は帯縄文の安行式前半の土器を素材とする。2では素材土器片の円文がいかされている。

注口土器注口部 (第34図31～28)

出土した注口土器は多くない。注口部だけを抽出した。33はよく磨かれた比較的長さのあるもので、加曾利B式に該当しようか。34は注口下に貼瘤が見られる。32・35では貫通孔を穿った後で注口部を差し込んだ成形過程が窺われる。

ミニチュア土器 (第34図39～41)

それぞれの資料の推定口径は、39が4cm、40が5.4cm、41が3.2cmである。

蓋 (第34図45)

推定口径8.6cmを測る素文の蓋で、摘みは残されていない。

土版 (第34図43・44、第35図1)

第34図43は厚みのある土版の残欠で、入組文となると思われる三叉文が窺われる。44は両面に沈線文様を描く土版の一隅で、小孔が穿たれる。第35図1は表裏に沈線で文様の描出された資料で、正面には三叉文が、裏面には入組文が窺われる。

焼成粘土塊 (第35図2・3)

2・3は小型の焼成粘土塊と思われ、特段の成形、整形は認められない。

土偶 (第35図4～7・9・10)

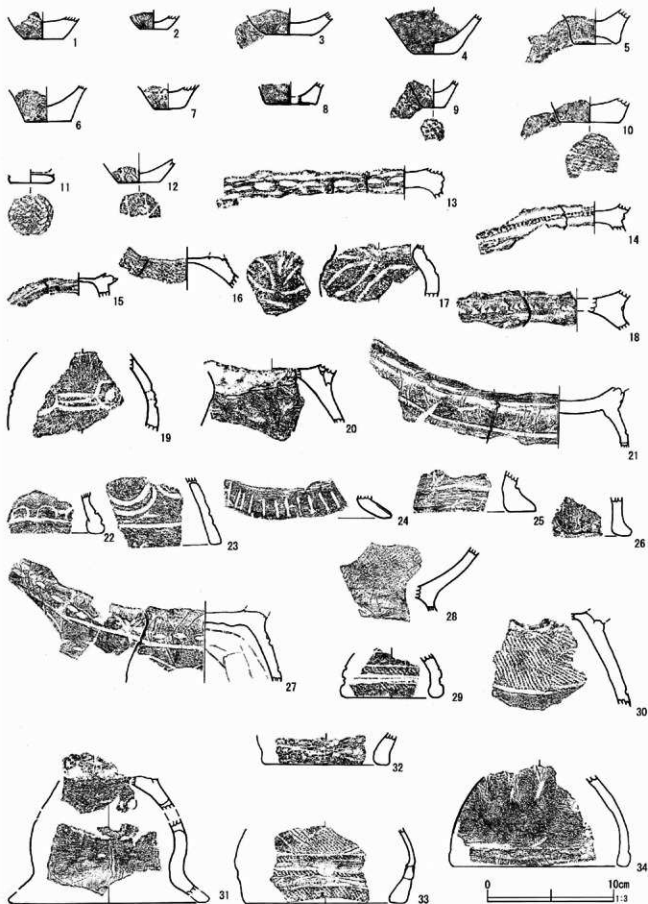
4は素文の土偶脚部、5はミミズク土偶の髪、6は中空ミミズク土偶の耳である。正面の円形の耳飾り表現の沈線内には赤彩痕が残される。7もミミズク土偶の顔面で左目が残される。9はミミズク土偶の脚部である。10は小型のミミズク土偶の肩から腕と思われる。

動物型土製品 (第35図12)

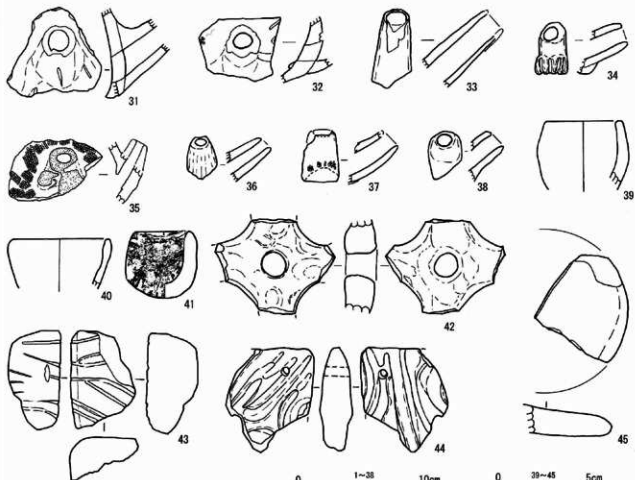
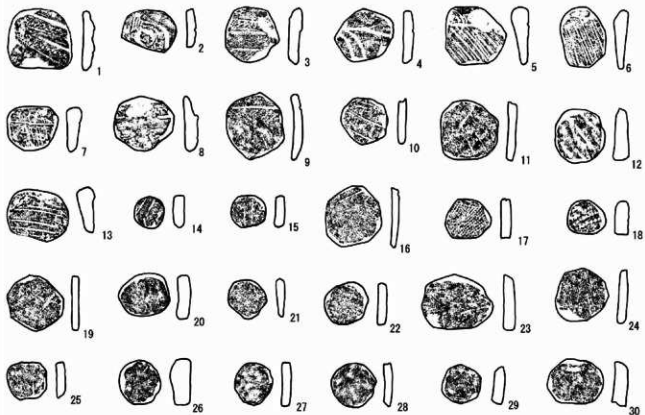
中空の亀形土製品である。全長12cm、幅8.2cmを測る。甲羅部と尾部を欠く。腹側には円窓を持ち、この両側に脚が付される。円窓から尾部に向かって1条の沈線が認められる。また、首部にも沈線が認められるが、そのほかに明瞭な装飾的要素は認められない。亀形土製品は、類例の多くない中、これまで、精巧な作りのものが知られてきたが、「粗製」の資料という意味で一石を投じる事例であると思われる。

異形台付土器 (第35図8)

8は異形台付土器の胴部資料片で、円窓に合わせて大きく張り出す筒形の突起には集合沈線が引かれ、体部には、焼成前穿孔の小孔4個が認められる。文様は沈線に縁どられた毛筋彫りの細隆帯によって描出され、その交点に横長の貼瘤を持つ。縄文時代後期安行Ⅱ式期の所産と思われる。



第33図 グリッド出土遺物 (24)



第34図 グリッド出土遺物 (25)

手觸形土器 (第35図11)

「 \cap 」形の東部とその両側に貼り出す鱗状の小突起の付された資料で、持ち手部分を欠く。残存長6.8cm、最大幅6.6cmを測る。立ち上がり部分は欠損しており、背面には、向かい合わせの弧線と入組弧線文などが描出される。

耳飾 (第36図)

土製の耳飾34点が出土した。その多くは残欠である。1は推定径8cmを測るもので、向き合う蕨手文が窺われる。2は推定径6.6cmを測るもので、同心円状の渦巻門が窺われる。推定径6.8cmを測るもので、半肉彫りの「 π 」字状のモチーフが窺われる。4は直径3.3cmを測る糸巻状の資料である。短沈線による曲線が描かれる。13は土製円柱状の素文の資料、14は刺突の施された資料、15は透彫りによる渦巻文の描かれた資料である。

不明土製品 (第34図42)

42は中央に円窓を持ち、四方に腕の伸びる素文の資料である。随所に指頭圧痕が残される。

中世～近代資料 (第37・38図)

カワラケ (第37図1～5)

いずれも素焼きでロクロ成形によるカワラケである。3・4では底面に回転糸切痕が明瞭に残される。

陶器 (第37図6～11)

6・8・9は白灰色の釉薬の掛かった志野焼の小皿である。8は口径10cmを測るもので、口唇部は外側に挽き出されるように開く。高台は削り出しである。7は鉄釉の施された小皿である。推定口径は11cmほどと見られ、やや厚みのあるぼてりとした仕上がりである。10は透明感のある黄緑色の釉の施された瀬戸美濃産の小皿である。推定口径は13cmを測る。やや外に張った腰から緩やかに湾曲しながら挽き上げられる。11は見込みに花卉状の陰刻を持つ菊皿である。推定口径は15cmほど、口縁部は外折する。

ガラス製品 (第37図12～25・29)

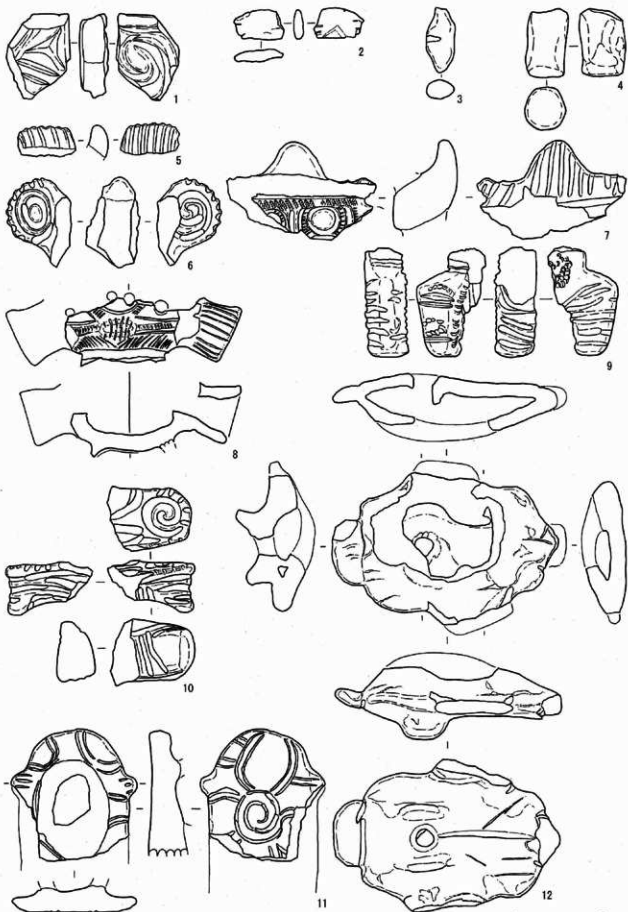
いずれも近代の資料であるが、容器の意匠や文字資料もあり情報量の多い資料群を抽出した。12・13は試験管、14・15は小型の薬ビンと思われる。16は「PILOT」などの文字が窺えることからインクビンと思われる。17・18は軟膏類を入れたと思われるもの、19～21はガラスビンの蓋である。22は薬ビンで「鉄道病院 鉄道診療所」の文字が窺われる。23は目薬のビンである。24は達磨のような髭のある顔面装飾を持つヒサゴ型の小型のビンである。25は石蹴りの石と思われ、体をひねる人物のレリーフとともに「投手」という文字が窺えることから、野球選手を表したものと思われる。29は全長13.8cm、最大幅9cmを測る透明のガラスビンで、星形の枠内に錨やなどの描かれたレリーフが付される。ガラス製の蓋には、「INUISEIZO」の文字が窺われ、中央に小孔が貫通する。哺乳瓶であるという。

土製品 (第37図26～28)

26は土製の人形である。27・28は土製人形の型と思われ、27では人面、28では星形のような陰刻が見られる。

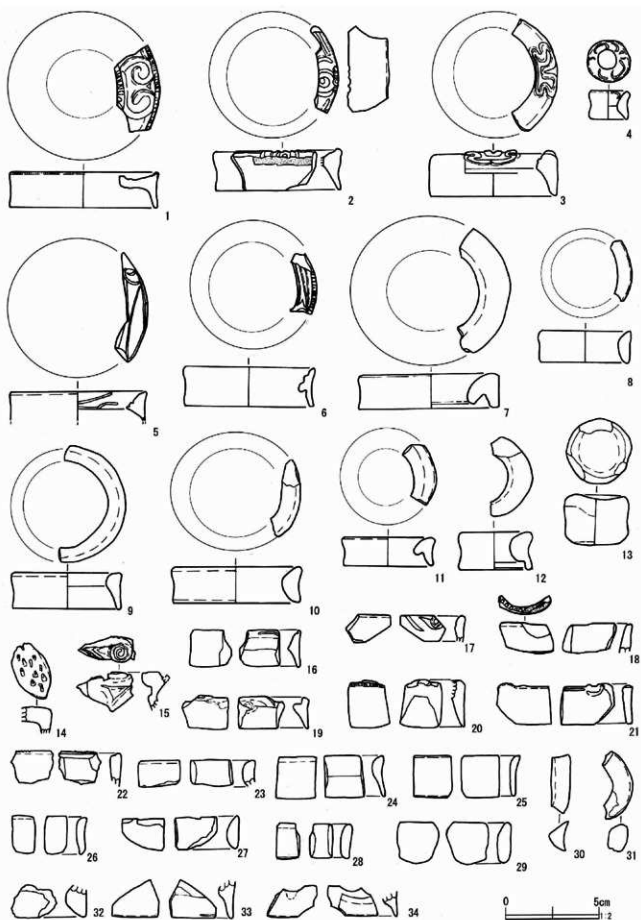
金属製品 (第38図)

1は鉄刀子である。残存長19.3cm、身部長15.8cm、茎部長3.5cm、身部幅2.2cm、茎部幅1.6cm、身部厚0.4cm、茎部厚0.5cm、重量58.2gを測る。茎部を欠損しており、目釘穴部分が折損したものと思われる。身部が

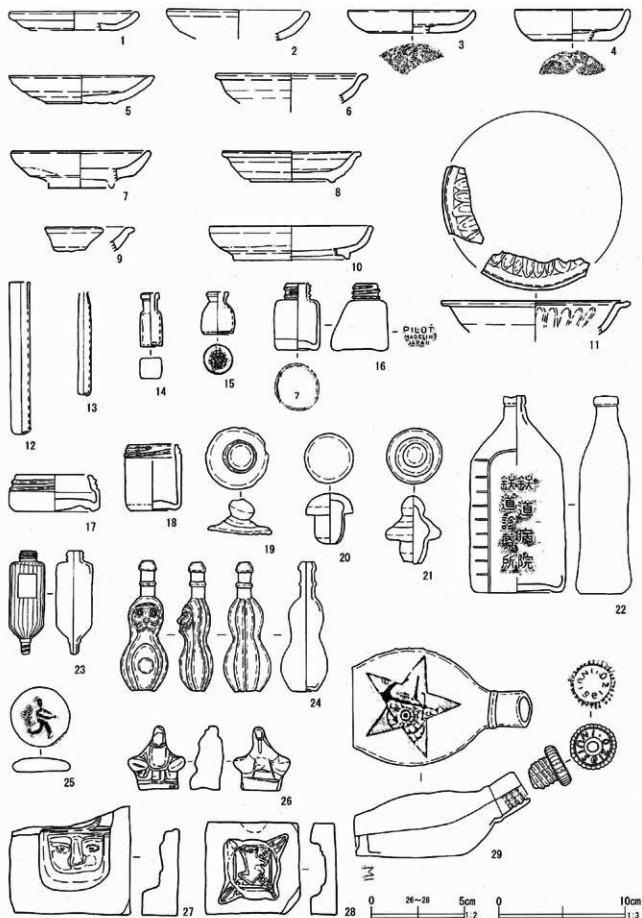


第35図 グリッド出土遺物 (26)

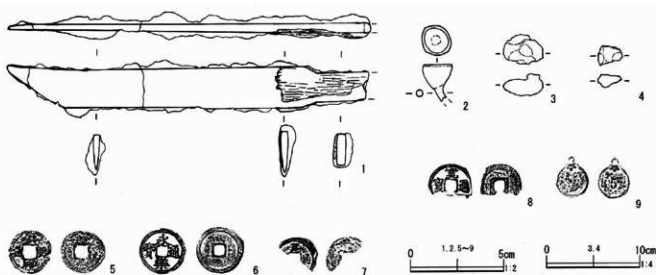
0 5cm
1:2



第36図 グリッド出土遺物 (27)



第37図 グリッド出土遺物 (28)



第38図 グリッド出土遺物 (29)

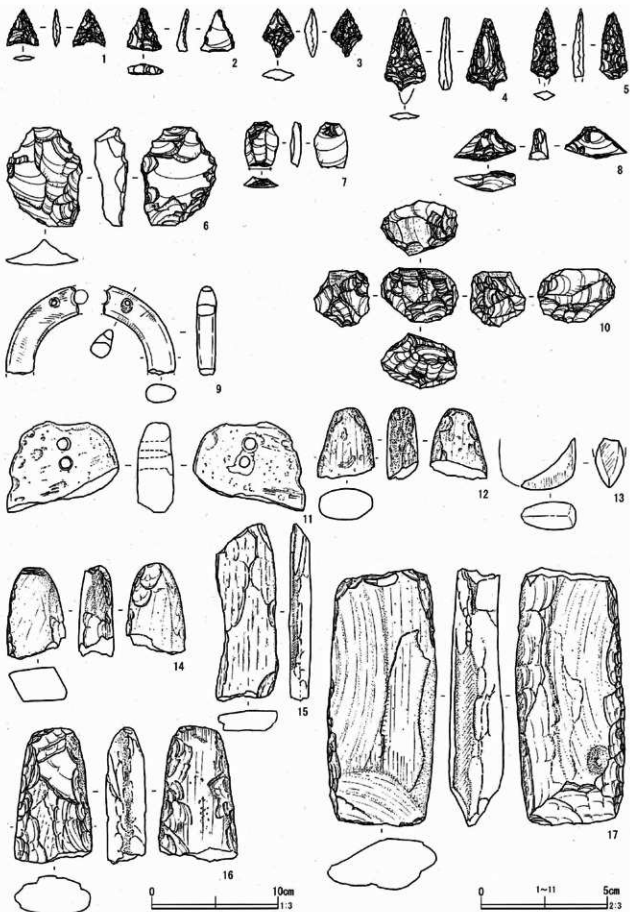
やや外反する。関部は撫関を呈し、茎部厚が身部厚よりも厚い。関部にまで及ぶ木質の付着が片面に認められ、木柄の痕跡と考えられる。刀子としたが、短刀に近い趣がある。2は煙管の雁首で、火皿のみが残存している。火皿の直径は1.5cm、重量は3.9gを測る。3・4は鍛錬鍛冶滓と考えられる鉄滓である。3は長さ3.2cm、幅4.3cm、厚さ2.5cm、重量は36.3gを測る。磁着度は4であった。4は長さ2.1cm、幅2.1cm、厚さ1.4cm、重量は8.0gを測る。磁着度は3であった。5~8は銭貨である。5は六銭であるが摩耗が著しく文字が判読できない。6は永楽通宝、7・8は寛永通宝である。9は銅製のペンダントであろうか。上部に吊り下げためのリングが付き、片面には人物の横顔が彫られているようである。

石器・石製品 (第39・40図)

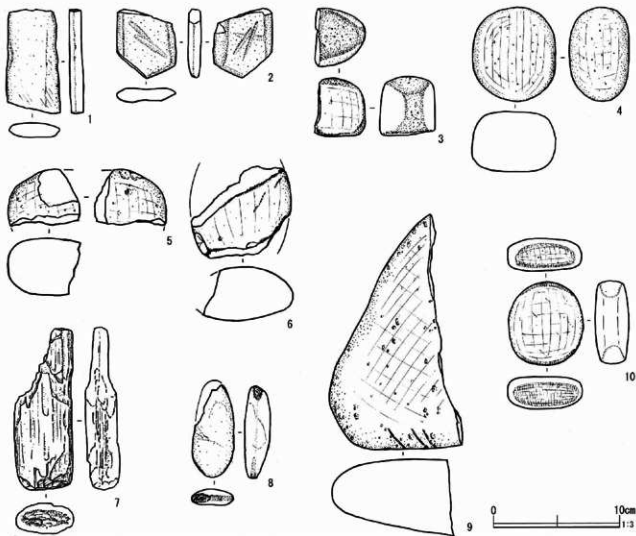
石鏃 第39図1~5が石鏃である。1・2は平基無茎の石鏃で、2は不整形剥片を素材とし、裏面には素材剥片の主剥離面を大きく残す。3~5は有茎石鏃である。3は全長が短く小振りのものであるが、4・5は全長が3cmを超えると推定される大振りの資料である。4はかえしの明瞭なものであるが、5は細身でかえしの張らないタイプの資料である。

二次加工剥片 第39図6~8が該当する。6はフリント製で、縦長の不整形剥片を素材とし、正面からの不規則な押圧剥離で両側縁に調整加工を施している。基部は打縮を剥がすように階段状の剥離が施される。7は黒曜石製の縦長の剥片で、端部に裏面からの加撃で調整加工を施している。基部には、打縮と打縮裂痕が残される。8は横長の貝殻状の剥片を素材とする。素材剥片の剥離方向に直行するように切断し裏面から細かな押圧剥離を加えている。調整加工は、「ハ」の字に開く両側縁にも及ぶ。

石核 第39図10はチャート製の石核である。当該期は、チャート製の剥片や石核が多量に出土するケースがあるが、本調査地点では目立たなかった。資料は多面体を呈する石核の残核である。剥片剥離作業面は複数であると思われ、図上面、図下面のほか、左右両面にも剥片剥離後の稜線が明瞭に残る部分が観察される。



第39図 グリッド出土遺物 (30)



第40図 グリッド出土遺物 (31)

石製裝飾品 第39図9は推定直径が4cmほどの塊状耳飾と思われる残欠である。補修孔2孔が観察される。

軽石製品 第39図11は軽石製の浮子である。扁平に仕上げられ、正面側から2つの円孔が穿たれる。2倍以上の長さがあったものと推定される。

磨製石斧 第39図12・14・16が該当する。12・14は基部残欠である。16は刃部を欠く。いずれも敲打調整痕を明瞭に残すもので、14は他の何らかの機種からの転用品と思われる。

打製石斧 第39図17は石皿の破片を転用した大型の打製石斧である。石皿としての使用面が両面に認められ、研磨痕も認められるが、側縁や刃部の状況からひとまず打製石斧として分類した。長軸20cmを超える当該地域としては珍しい大型品であるが、基部は転用後に欠損しているものと思われ、さらに大きかった可能性がある。

砥石 第39図15、第40図1・2が当たる。15は緑泥片岩製で側縁に潰痕が認められるほか、わずかに研磨された痕跡を持つ。1・2は砂岩製で、2では浅い桶状の使用痕が認められる。

磨石 第40図3~6・10が該当する。3は磨石残欠であるが、欠損後、敲石として転用され、潰痕は上下の

第4表 第10地点出土石器計測表

図版	番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
39	1	調査区	凹茎無茎石楯	黒燐石	1.3	1.3	0.3	3.4	
39	2	B2 ハ-1	二次加工剥片	チャート	1.7	1.3	0.4	0.6	
39	3	調査区	石楯	黒燐石	1.9	1.2	0.5	0.7	
39	4	調査区	石楯	石英	2.9	1.6	0.5	2.0	燻けている
39	5	B2	石楯	チャート	2.7	1.0	0.4	1.1	
39	6	B3 1	二次加工剥片	フリント	3.9	3.0	1.3	12.4	
39	7	B2 ハ-1	二次加工剥片	黒燐石	1.8	1.3	0.4	0.9	
39	8	B2 ハ-1	二次加工剥片	チャート	2.4	1.2	0.7	2.0	
39	9	A4 トレンチ1	挾状耳飾	—	(4.3)	1.2	0.8	(6.4)	
39	10	B3 1	石楯	チャート	3.1	2.2	2.2	14.9	
39	11	トレンチ2	軽石製品	軽石	(3.5)	4.3	1.5	(3.7)	
39	12	B3 1	磨製石斧残欠	緑色凝灰岩	(5.3)	4.3	2.4	(92.4)	
39	13	SD1	磨製石斧	砂岩	(3.5)	(4.7)	(2.2)	(20.0)	残欠
39	14	B2 イ	不明(磨斧?)	硬砂岩	7.0	4.6	2.6	138.4	
39	15	B3 2	不明	緑泥片岩	13.8	4.6	1.7	204.0	
39	16	A4 トレンチ1	磨製石斧残欠	ホルンフェルス	(10.5)	6.0	3.1	(308.0)	
39	17	B2	転用打製石斧	緑泥片岩	19.6	8.4	3.9	1110.0	
40	1	A2	砥石	砂岩	(8.2)	4.0	1.1	(50.3)	
40	2	B3 1	砥石	砂岩	(5.3)	4.6	1.0	(28.7)	
40	3	B3 1	磨石	安山岩	(4.6)	(4.0)	4.2	(118.8)	
40	4	64-B2	磨石	安山岩	7.4	6.5	4.8	370.0	
40	5	SD1	磨石	安山岩	(4.5)	5.6	4.4	(150.3)	残欠
40	6	B2 ニ-1	磨石	硬砂岩	(6.6)	8.0	4.3	(268.0)	
40	7	B3	不明(砥石?)	絹雲母片岩	12.7	4.5	2.4	177.6	
40	8	B4 1	砥石	硬砂岩	7.2	3.2	2.0	51.1	
40	9	SD2	砥石	閃緑岩	18.4	(10.5)	6.0	(1245.0)	残欠
40	10	B2 イ-2	磨石	砂岩	6.5	5.9	2.7	153.7	

端面のほか、側面にも及ぶ。4は安山岩製で、表裏と側面にも使用が認められる。5・6は磨石残欠である10は扁平な砂岩製で、表裏両面とも極めてよく磨られている。両端面は敲打痕と擦痕の両者を残す。

敲石 第40図7・8が該当する。細長い石材の両端部に敲打痕が残されるもので、当該期に比較的好く見られる。大きさから、通常の敲石とは性質が異なり、剥片剥離作業における間接打撃に用られた中間具であるものと思われる。7は絹雲母片岩製で、石剣等の残欠からの転用品と思われる。8は長楕円形の自然礫で、上端部は節理面から剥落している。

2 第12地点の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

●第2号掘立柱建物跡（第42図）

調査区東端に位置し、第7号土坑を切る。調査区内で4基の柱穴を検出したが、さらに調査区外にも建物を構成する柱穴が展開するようである。桁行3間以上、梁行1間以上の側柱建物で、主軸方位はN-7° - Wを指す。検出部分のみで桁行約3.6m、梁行約1.0mを測る。柱穴間は2mほどの等間隔である。柱穴の規模は第5表のとおりである。

出土遺物（第47図）

土器 9・10は、斜行する沈線文の引かれたもので、10は2条1組の並行沈線である。11は無文の平緑土器の口縁部資料である。

(2) 土坑

●第7号土坑（第43図）

調査区南東端に位置し、第2号掘立柱建物跡に切られる。東側は調査区外であるが、残存部で長径約2.7m、短径約1.2mを測る。確認面から床面までの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第47図）

土器 1は口唇部が外側へ張り出す縄文施文のもの、2は口縁部に刺突列を持つ内湾する平緑深鉢、3は無文の平緑資料、4は横走する3条の沈線とこれに重なるようにクランク状の沈線が引かれるもの、5は半截竹管による斜位の並行沈線が引かれるものである。

土製品 6は円柱状の素文の耳栓である。

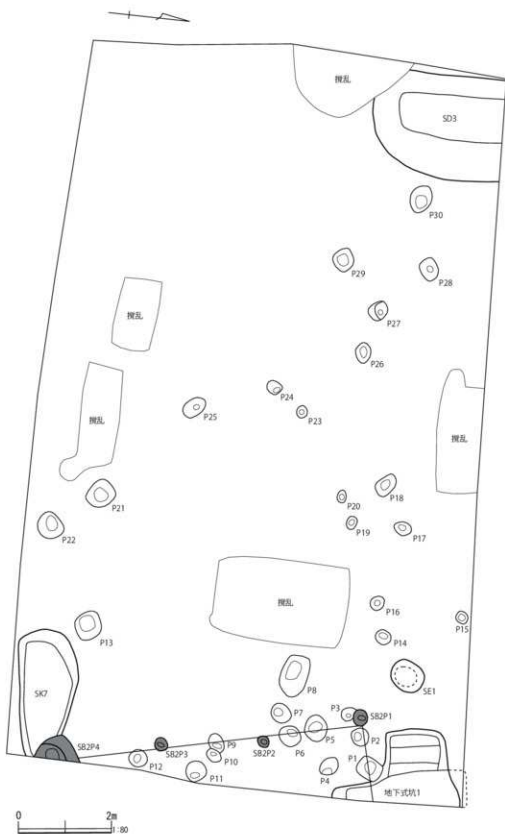
(3) 溝跡

●第3号溝跡（第44図）

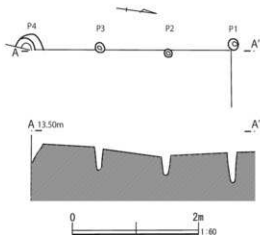
調査区北西端に位置する。調査区内で確認できる部分では、調査区北端から南へ約2.8m延伸する。調査区での最大幅は約2.2mを測り、断面形は逆台形を呈す。確認面からの最大深は約0.9mを測る。

出土遺物（第47・48図）

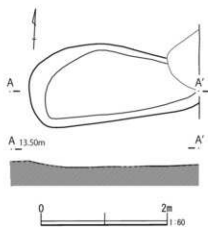
土器 第47図16は口縁部に「8」の字状の貼瘤の見られる薄手の深鉢形土器で、口唇部はわずかに内折する。17~19は深鉢形土器に付された口縁部の装飾突起である。17は口唇部を窪め微隆帯を垂下させるもの、18は口唇部に円形刺突を施し白状に仕上げ、外面には太い沈線を放射状に引くもの、19は扇状の小突起の両面に浅い円形刺突を付し、この下に太い縦位の沈線を引くものである。20は外削ぎとなる口唇部に棒状施工具を押し付けるように刺突を施す平緑資料である。21~26はやや内湾傾向を持つ平緑の浅鉢形または碗形を呈すると思われる資料で、21~23は縄文帯が、24~26では2条の沈線が観察される。27~30は口縁部に頸状隆帯の貼られた平緑深鉢である。31は内湾傾向を示す平緑土器で単節縄文が施される。32~35は口縁部に帯縄文の施される一群で、33は小突起が付され、35では縦位のスリットを持つ貼瘤が観察される。36・37は口縁部に渦巻状の入組文が観察されるもので、36は波状縁深鉢、37は内湾する平緑深鉢である。38~44は口縁部に連続刺突を施す砲弾形の平緑土器である。いずれも口縁部に隆帯は伴



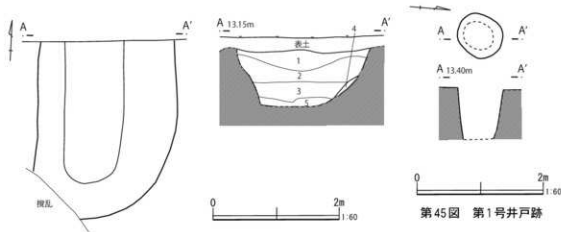
第41图 第12地点全测图



第42図 第2号掘立柱建物跡



第43図 第7号土坑

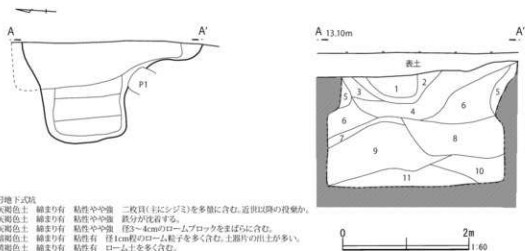


第45図 第1号井戸跡

SD3

- 1 暗褐色土 締まり強 粘性強 径3~4cmの灰褐色ブロックをまばらに含む。径1cm程度のローム粒子と赤色粒を多く含む。
 2 暗褐色土 締まり強 粘性強 径3~4cmの灰褐色ブロックを多く含む。突角隅めたかのように硬く締まる。
 3 黒褐色土 締まり強 粘性有 径2~3cmのロームブロックをまばらに含む。
 4 黄褐色土 締まり有 粘性有 ローム土を多く含む。
 5 茶褐色土 締まり有 粘性有 径1cm程度のローム粒子と赤色粒を多く含む。

第44図 第3号溝跡



第1号地下式

- 1 灰褐色土 締まり有 粘性やや強 二枚目(主にシジミ)を多量に含む。近世以降の役使か。
 2 灰褐色土 締まり有 粘性やや強 鉄分が沈着する。
 3 灰褐色土 締まり有 粘性やや強 径3~4cmのロームブロックをまばらに含む。
 4 暗褐色土 締まり有 粘性有 径1cm程度のローム粒子を多く含む。土層内の出土が多い。
 5 黄褐色土 締まり有 粘性有 ローム土を多く含む。
 6 暗褐色土 締まり弱 粘性弱 径1cm程度のローム粒子をまばらに含む。
 7 暗褐色土 締まり有 粘性有 径3~4cmのロームブロックを多く含む。
 8 暗褐色土 締まりやや強 粘性有 径3~4cmのロームブロックをまばらに含む。
 9 暗褐色土 締まり強 粘性有 横丁式(の)瓦目編み土(ローム土)である。
 10 茶褐色土 締まり有 粘性有 径1cm程度のローム粒子と赤色粒をまばらに含む。
 11 黄褐色土 締まり弱 粘性有 径2~3cmのロームブロックを多く含む。

第46図 第1号地下式坑

第5表 第2号掘立柱建物跡ビット計測表

番号	長径	短径	深さ
1	40	30	52
2	36	26	41

番号	長径	短径	深さ
3	30	28	35
4	94	50	42

※単位は全てcm

第6表 第12地点ビット計測表

番号	長径	短径	深さ
1	50	42	27
2	40	38	26
3	(25)	29	28
4	48	33	46
5	58	48	20
6	50	44	51
7	46	46	34
8	88	54	56
9	50	30	34
10	35	(25)	26
11	46	46	38
12	42	37	35
13	57	56	17
14	34	17	11
15	16	22	22

番号	長径	短径	深さ
16	32	18	12
17	40	30	20
18	50	30	27
19	26	20	21
20	33	20	20
21	64	57	19
22	56	48	24
23	24	24	25
24	30	28	24
25	52	33	50
26	36	32	60
27	40	36	38
28	45	36	80
29	40	40	10
30	64	46	34

※単位は全てcm

わない。45は推定口径15cm余りと思われる内湾する平縁土器で、体部には半截竹管によって向き合う縦位の弧線文が観察される。46～48は縄文地文上に沈線による文様が描かれる胴部資料である。

第48図1～3は胴部に横走する刺突列を持つ比較的小振りな土器である。3は刺突列を挟んで上下に弧線文を連ねるものと思われ、弧線の交点上部に円形刺突が施される。4は格子目状の沈線の引かれた胴部下半の資料、5は斜行する条線文の施されたものである。6は横走する2条の沈線とその上部に引かれた斜行する沈線の窺われる資料である。7～11は格子目状の条線文の施された胴部資料である。12・13は刺突を持つ横位の隆帯の貼られたもの、14は破片上部に弧状の隆帯が窺われるもの、15・16は横位の沈線の窺われる資料である。17～22は単節縄文の施された資料、23～25は無文の資料である。26～31は縄文土器の底部資料である。26は高台風の作りの上げ底の資料、27～30は網代底の資料である。32は台付鉢の脚台部である。鉢底の括れ部と台部中央に沈線が巡る。

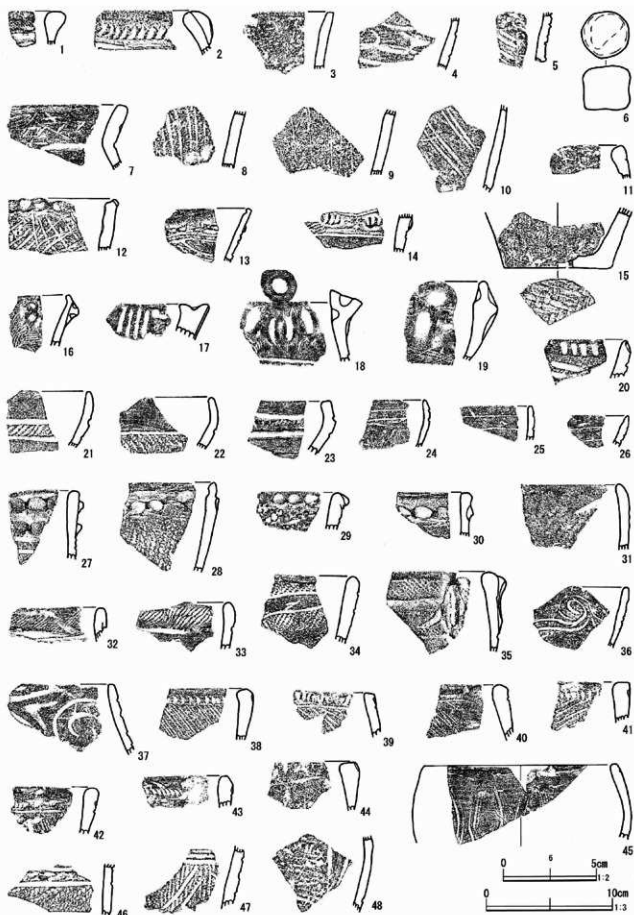
土製品 第48図33は土製円盤である。格子目状の沈線の引かれる土器片を素材とする。

近世資料 第48図34～36があたる。34・35はカワラケ、36は焙烙である。

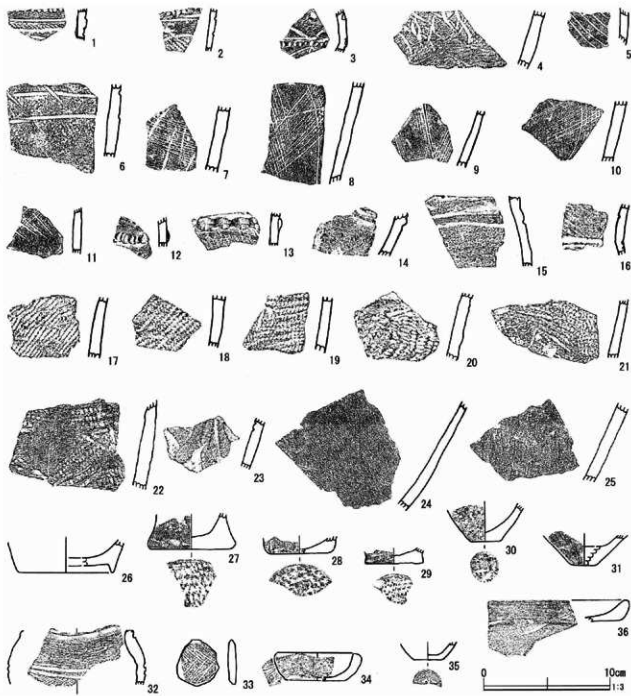
(4) 井戸跡

●第1号井戸跡 (第45図)

調査区北東寄りに位置する。平面形は直径0.7mの円形を呈す。確認面から床面までの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。開口部が狭く直線的に落ち込む。近世以降の所産と考えられる。



第47図 掘立柱建物跡・土坑・溝跡・井戸跡・ピット出土遺物



第48図 溝跡出土遺物

出土遺物 (第47図)

土器 7は口縁部が「く」の字に屈曲する平縁の広口壺で、括れ部に1条の沈線が、外反する口縁部には刺し切るような刺突文が施される。8は縦位の条線文の施されたものである。

(5) 地下式坑

●第1号地下式坑 (第46図)

調査区北東端に位置する。東側は調査区外であるが、残存部で長径約3.0m、短径約1.6mを測る。確認面から床面までの深さは約1.8mを測り、底面は平坦である。西側に張り出しており、この箇所は竪穴がつけられたものと推定される。西側の張り出し部は、西から東に向かって段階的に下がっていく。壁面は

オーバーハングしており、横断面形はフラスコ形を呈す。

出土遺物 (第49～51・52図)

土器 第49図1は緩波状縁の深鉢で斜行する条線文が窺われる。2は口縁部に引かれた横走沈線と、「ハ」の字に開く沈線が窺われる縄文地文の平縁土器である。3は帯縄文の施された内湾する平縁土器で、押し引き状の刺突列も窺われる。4～16は帯縄文の施される一群である。4～7は平縁土器で、縦位の貼瘤が窺われる。8～10は波状縁土器で、波頂部に縦位の貼瘤が見られる。11～16は口縁部に単節縄文の施された帯縄文が窺われるもので、11では垂下する沈線や横走沈線が、14では帯縄文に並行して施される刺突列などが窺われる。17～24は口縁部に縄文帯の見られる一群で、17・18は上向きの弧状の沈線で区画されるもの、19は外折する皿形のもの、20は三叉文の施されたものである。21～24は「く」の字に屈曲する縄文施文の口縁部を持つものである。25～28は細密沈線文系の一群で、25・26では口縁部に刺突が施されるもの、27は波状縁となるものである。29～31は太い沈線で入組文等のモチーフが施されたものである。32・33は口縁部に刺突文帯の見られるもので、32は口縁部が外折するもの、33は薄手で直立する口縁部を持つものである。34～45は安行式に伴う粗製土器の一群で、35～38は口縁部に刺突文列の施されるもの、39～45は口縁部に貼った隆帯に刺突を加えた一群である。39では縄文を施すレンズ状文が、40では垂下する沈線と蛇行沈線が窺われる。

第50図1～5は口縁部に1条ないし2条の沈線が看取される無文の平縁土器である。5は皿形であろう。6～16は平縁無文の深鉢である。6～10は輪積痕を顕著に残すもの、11は比較的薄手の碗形のもの、12は胴部の広がる壺形土器である。13は双頭の突起を持つものである。17は毛筋彫り風の刺突文帯と磨消文帯が胴部を巡る碗形土器である。18は「ハ」の字に開くレンズ状の縄文帯が見られるもの、19は背合わせの弧線区画の間に縄文が充填されるもの、20は左下がりの沈線が縄文帯と磨消文帯とを画すもの、21は玉抱きとなる三叉文の見られる皿形土器である。22～24は縄文帯上に貼瘤のあるもの、25は帯縄文を持つ胴部資料、26～29は無文地に沈線で、区画を描出したり蛇行沈線を描出したりするものである。30はステッキ状の入組文が、31は胴部の刺突文帯と弧線文が、32は三叉状入組文が窺われる資料である。33は横走する縄文帯が施されるもの、34～38は刺突を伴う隆帯が胴部を巡る砲弾形の深鉢である。39は縄文地文上に斜行沈線の引かれるもの、40・41は縄文の施されたもの、42は推定口径17cmほどと思われる碗形土器の胴部資料である。43～45及び第51図1～6は条線文の窺われる胴部下半の資料である。

7～14は無文の胴部資料である。15～26は底部を一括したもので、17は底部周囲に沈線を巡らせるもの、18は網代底を持つもの、16・22は縄文の施されるものである。27は注口部、28は裝飾突起である。29～31は台付土器の脚部である。29ではレンズ状の31では円形の透かしが穿たれる。

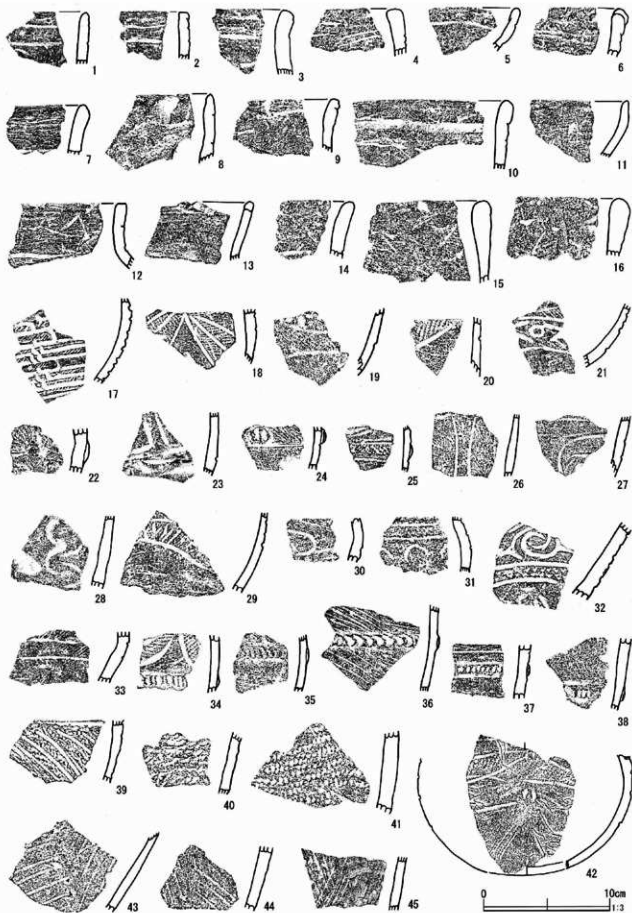
土製品 第51図32～35・37は土製円盤である。33は横走隆帯の貼られた口縁部、37は横位沈線の引かれる土器片を素材としている。39はミズク土偶の脚部である。

中・近世資料 第51図36はカワラケである。推定口径は10cmほどである。38は播鉢の底部、40・41は焙烙である。

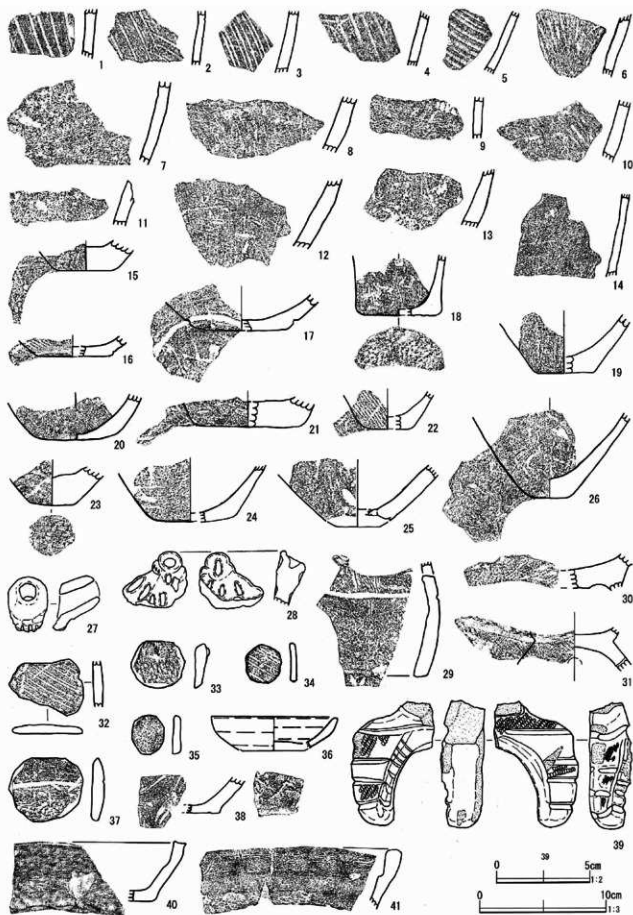
石器 第53図1は2次加工剥片である。剥片両側縁に裏面からの加撃による調整加工を施している。裏面は中央に素材剥片の主剥離面を残し、打窟は除去している。2は石錐である。貝殻状の不整形剥片を素材とし、周囲に押し剥離を加え、錐部を作り出している。3～5は敲石である。2・4は細長い自然礫を素材としその両端に敲打痕が残される。5は石棒の転用品と思われる。6は凹石である。大きなものから剥落し



第49图 地下式坑出土遗物 (1)



第50图 地下式坑出土遗物(2)



第51图 地下式坑出土遗物(3)

たものと思われる。7は磨石である。楕円形で側縁は面取りされる。磨面は両面に及びよく磨られている。8は、石皿残欠である。10・11は砥石である。10は表裏がよく磨られるほか、溝条の使用痕が窺われる。11は小さく摩耗したものである。

ガラス製品 第53図12は楕円形で扁平なガラス製品である。

(6) 調査区出土遺物 (第47・52・53図)

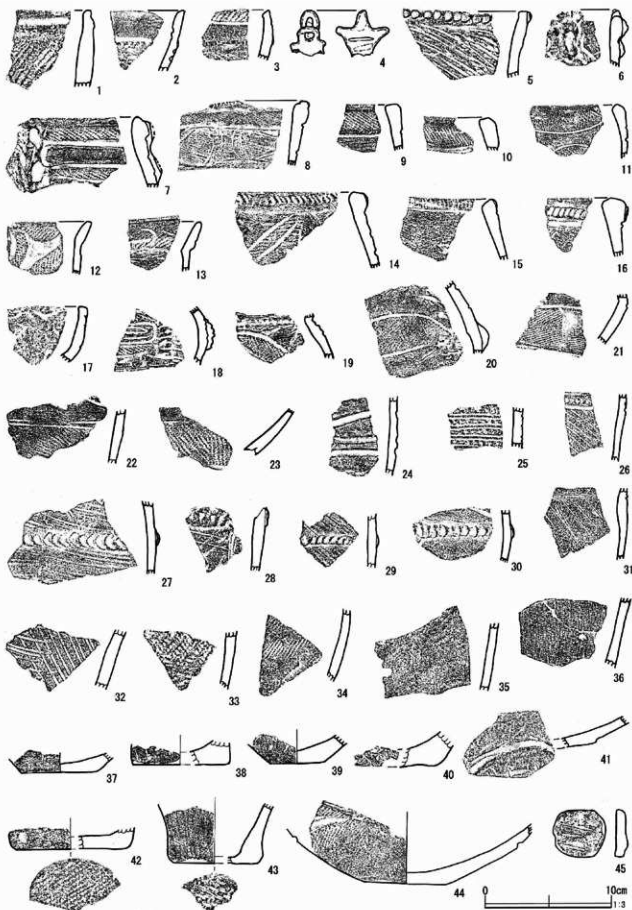
土器 第47図12～15は調査区内のピットから出土した遺物である。12は口縁外縁に鎖状隆帯を貼り、単節縄文地上に乱雑な格子目状の沈線を引き平縁土器、13は無文となる口縁部と胴部文様帯との間を細い鎖状隆帯で画する小型の深鉢形土器である。口唇内面には、1条の浅い沈線が巡る。14は沈線で画された縄文帯上に2個の双刺瘤が付された胴部資料、15は推定底径8.4cmほどの底部資料で網代底を呈する。

第52図1は口縁部に1条の沈線が引かれる縄文施文の平縁土器である。2は口縁部無文帯と胴部縄文帯との間を、刺突を伴う細い隆帯で画す平縁土器である。3は口縁部に幅の狭い縄文帯を持つもの、4は口縁部の装飾突起である。5は口縁部に鎖状隆帯を貼る平縁粗製土器である。6・7は帯縄文をつなぐ縦位の貼瘤を持つ平縁土器、8～10は帯縄文を持つ平縁土器である。11は背合わせ弧線区画の窺われるもの、12は三叉文の窺われるものである。13は外折する口縁部に「C」字状の沈線文の窺われる浅鉢形土器である。14～16は砲弾形の平縁深鉢で、14では斜行する縄文帯が施される。17は輪積痕を顕著に残す無文の浅鉢形土器である。18は縦位の貼瘤の付される内湾する胴部資料、19・20はレンズ状の縄文帯の窺われる胴部資料、21・23は浅鉢の胴部資料であろう。24は横位の沈線3条が窺われるもの、25は縄文地文状に横位の並行沈線が引かれるものである。26～31は、砲弾形の器形を持つ平縁粗製土器の胴部資料で、26では刺突列が、31では沈線が、27～30では刺突を伴う隆帯が胴部を巡る。32は条線文の施される胴部下半の資料、33・34は縄文の施されるもの、35・36は無文の資料である。37～44は底部資料で、41は底面周囲に沈線を引きくもの、42・43は網代底のもの、44は縄文地上に太い沈線が引かれる大きく開くものである。東関東前浦式に比定できる。

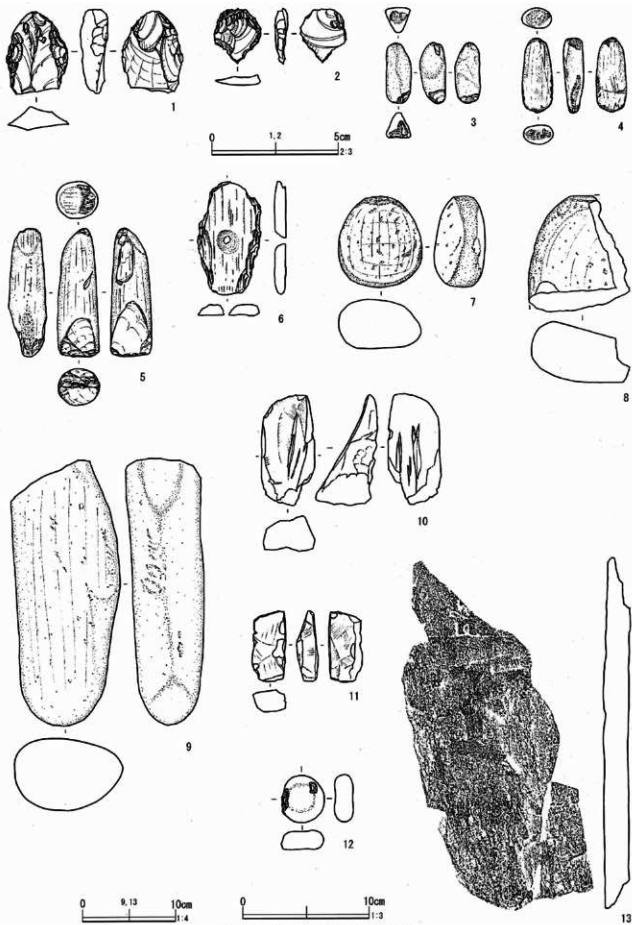
土製品 第52図45は土製円盤である。横位の隆帯が施される破片を素材としている。

石器 第53図9は研磨痕のある棒状石製品である。上部を欠損する。研磨は表裏両面に及び、側面には敲打痕も認められる。

板石塔婆 第53図13は緑泥片岩製で、上部に1条の沈線と文字と思われる線刻を認めるが判読できない。



第52図 調査区出土遺物



第53图 地下式坑・調査区出土遺物

第7表 第12地点出土石器計測表

図版	番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
53	1	第1号地下式坑	二次加工副片	—	3.3	2.4	1.1	8.0	
53	2	第1号地下式坑	ドリル	チャート	2.1	1.8	0.4	1.8	
53	3	第1号地下式坑	敲石	ホルンフェルス	4.8	2.0	2.0	24.9	
53	4	第1号地下式坑	敲石	硬砂岩	5.9	2.4	2.6	35.0	
53	5	第1号地下式坑	転用敲石	泥岩	10.2	3.3	2.8	131.7	
53	6	第1号地下式坑	凹石	緑泥片岩	9.0	5.0	0.8	66.5	
53	7	第1号地下式坑	磨石	閃緑岩	7.2	6.5	3.9	290.0	
53	8	第1号地下式坑	石皿残欠	安山岩	(9.8)	(8.2)	4.2	(387.0)	
53	9	試掘	不明	安山岩	(28.3)	11.0	7.5	(3860.0)	
53	10	第1号地下式坑	砥石	砂岩	8.8	4.2	2.7	116.8	
53	11	第1号地下式坑	砥石	砂岩	5.6	2.6	1.7	30.8	
53	12	第1号地下式坑	ガラス円盤	ガラス	3.8	(3.4)	1.4	(28.4)	
53	13	試掘	板磚	緑泥片岩	(27.8)	(15.8)	(2.0)	(1110.0)	

IV 総 括

1 第10・12地点の成果

入耕地遺跡の環状盛土遺構に関しては、既報告の第4・7地点の報告書（奥野編2012）中で詳しく論述されているが、本報告の第10地点は環状盛土遺構の推定範囲内に位置しており、調査前から遺構の良好な遺存が期待されていた。結果的に、縄文時代後・晩期の遺物は豊富に出土したものの、調査区全面に大きく攪乱を受けており、環状盛土遺構の構造を解明できる知見を得ることはできなかった。

第10地点における環状盛土遺構は、14世紀以降の「入耕地館跡」の造営に伴い大きく削平されたことに加え、現代の攪乱を受けたものと考えられる。遺物の出土は現地表から深さ30～50cmまでの範囲で多く認められ、その下層は褐色のローム漸移層となり、出土する遺物量は減少する。また、特筆すべき遺物として、攪乱内出土ではあるが、亀形土製品が出土している。類例は、さいたま市の東北原遺跡出土例や蓮田市の久台遺跡出土例が知られているが、埼玉県内では3例目の出土資料となる。

調査区中央を横断する第1号溝跡は、中世陶器が出土していることから、16世紀前後の年代が考えられる。土層観察の結果、少なくとも1回は掘り直しを行っている。遺物はロームブロックを多量に含む覆土が南側から北側へと流れ込んでいるため、溝の南側に土塁が存在した可能性が高い。溝跡の南側に位置する第1号掘立柱建物跡と合わせて、入耕地館跡とどのような関連を持つのか、今後検討を要する。

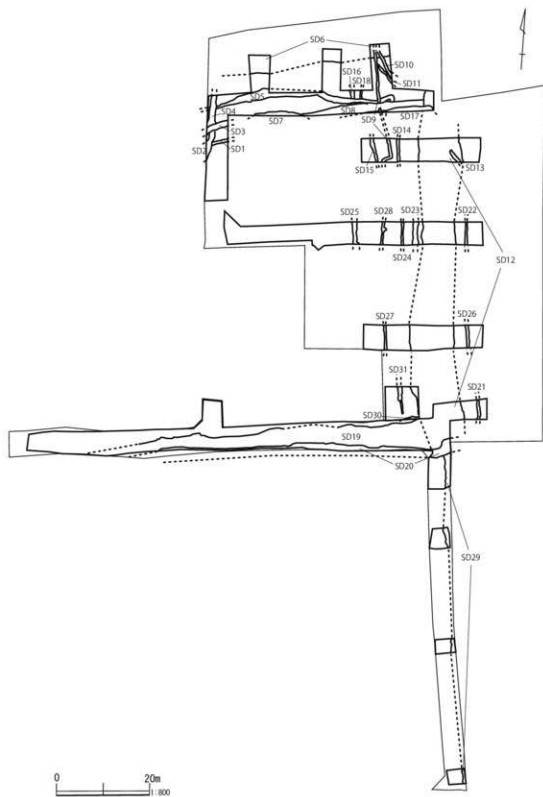
第12地点は、環状盛土遺構の推定範囲における内側裾部に位置している。第10地点と同様に後世の削平等を受けたようで、環状盛土遺構自体の痕跡は認められなかった。包含層中や第1号地下式坑の覆土中より縄文時代後・晩期の遺物は豊富に出土しており、付近に存在していた環状盛土遺構由来の遺物が流れ込んだものと考えられる。中世の痕跡を窺う遺構として、調査区北西端で検出した第3号溝跡の存在があげられる。溝跡の調査区内で最大幅は約2.2m、確認面からの最大深は約0.9mを測り、断面形は逆台形を呈する。調査区外北側に想定される谷部（堂礎の谷）に向かって延伸しており、入耕地館跡由来の区画溝であった可能性が考えられる。

2 溝跡について

入耕地遺跡北東部に展開する溝跡については、中世館跡（入耕地館跡）由来の区画溝として外堀のような機能が推定される。その詳細については、第8・9地点の成果をもとに既報告（杉山・奥野編2018）であるが、その後の整理により調査区とトレンチの関係の一部訂正すべき部分が認められたため、本書をもって訂正するとともに、改めて溝跡の概要について再報告したい。

第54図は第8・9地点の調査区とトレンチ、溝跡の配置図である。

第6号溝跡は、調査区北端に位置し、西から東へ約31.3m延伸し、西・東側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約2.6m、確認面からの最大深は約0.6mを測る。第12号溝跡は、調査区東端に位置し、北から南へ約77.0m延伸し、北・南側とも調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約4.7m、確認面からの最大深は約1.4mを測る。この2条の溝跡はその規模から、「濠」とも呼ぶべき大溝であり、出土遺物から少なくとも近世には存在しており、その後も数回の掘り直しを受けながら、近年まで排水路として機能



第54図 第8・9地点の調査区とトレンチ・溝跡配置図

していたようである。また、この大溝は小字の「茶屋」と「東」との境界とも合致しており、後世の地割にも少なからず影響を与えたようである。

第19号溝跡は、調査区の中央部分に位置し、西から東へ約60.6m延伸し、東側の様相は定かではないが、西側は調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約3.8m、確認面からの最大深は約0.7mを測る。その南に隣接する第20号溝跡は、西から東へ約60.0m延伸し、東側の様相は定かではないが、西側は調査区外へ延びる。調査区での最大幅は約0.6m、確認面からの最大深は約0.6mを測る。いずれも陶磁器類が比較的豊富に出土しており、中世館跡（入耕地館跡）の区画溝として機能していた可能性が考えられる。未報告であるが、遺跡の西寄りに位置する第13地点において、谷部（堂礎の谷）の埋土に掘削された中世の溝跡が検出されており、上面からは正応二年（1289年）の銘の入った板碑が1点出土している。溝跡の規模や走行方向から類推すると、第13地点検出の溝跡は第19号溝跡あるいは第20号溝跡と同遺構の可能性も考えられる。その場合、この区画溝は、第9地点から第13地点に向かってやや南に寄り、入耕地遺跡と正福院貝塚との間に展開する環状盛土遺構の中央部を通りながら、約70m延伸することになる。

参考文献

- 奥野麦生ほか編 1996 『入耕地遺跡（第2地点）』白岡町埋蔵文化財調査報告書第8集 白岡町教育委員会
奥野麦生編 2010 『入耕地遺跡—第1・3地点—』白岡町遺跡調査会調査報告書第9集 白岡町遺跡調査会
奥野麦生編 2012 『入耕地遺跡—第4・7地点—』白岡町遺跡調査会調査報告書第10集 白岡町遺跡調査会
松崎慶喜編 2007 『入耕地遺跡（第5地点・第6地点）』白岡町埋蔵文化財調査報告書第16集 白岡町教育委員会
杉山和徳・奥野麦生編 2018 『入耕地遺跡（第8・9・11地点）・正福院貝塚（第2地点）』白岡町埋蔵文化財調査報告書第27集 白岡町教育委員会

写 真 図 版



掘削作業状況



実測作業状況



第10地点作業の様子



第12地点作業の様子



第10地点調査全景



第1号掘立柱建物跡



第1・3号土坑



第2号土坑



第4号土坑



第5号土坑



第6号土坑



A3グリッド亀形土製品出土状況



第1号沟跡



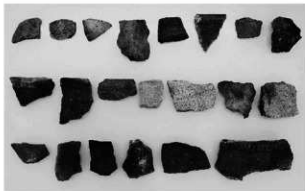
第2号沟跡



A2・3グリッド遺物出土状況



B2グリッド遺物出土状況



掘立柱建物跡・土坑・溝跡出土遺物 (第9図)



グリッド出土遺物② (第11図)

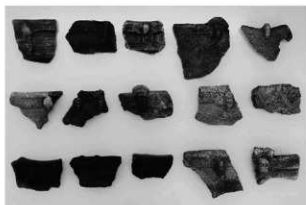


グリッド出土遺物① (第10図)



グリッド出土遺物③ (第12図)





グリッド出土遺物④ (第13図)



グリッド出土遺物⑥ (第15図)



グリッド出土遺物⑤ (第14図)



グリッド出土遺物⑦ (第16図)





グリッド出土遺物⑧ (第17図)



グリッド出土遺物⑩ (第19図)



グリッド出土遺物⑨ (第18図)



グリッド出土遺物⑪ (第20図)





グリッド出土遺物⑭ (第22図4)



グリッド出土遺物⑮ (第21図)



グリッド出土遺物⑯ (第22図6)



グリッド出土遺物⑰ (第22図1~3・5)



グリッド出土遺物⑱ (第23図)



グリッド出土遺物⑰ (第24図)



グリッド出土遺物⑱ (第26図)



グリッド出土遺物⑲ (第25図)



グリッド出土遺物㉑ (第27図4)



グリッド出土遺物㉒ (第27図1・2)



グリッド出土遺物㉓ (第27図4)



グリッド出土遺物㉔ (第27図3・5)



グリッド出土遺物㉔ (第29図)



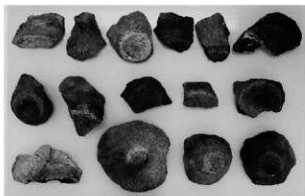
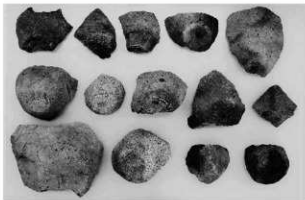
グリッド出土遺物㉔ (第28図)



グリッド出土遺物㉔ (第30図1~19・21・22)



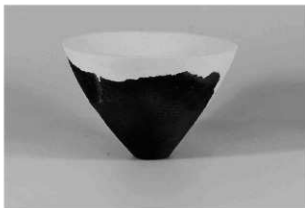
グリッド出土遺物㊟ (第30図20)



グリッド出土遺物㊟ (第32図)



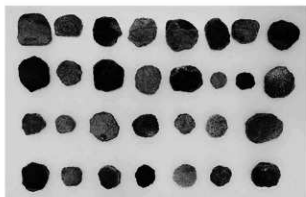
グリッド出土遺物㊟ (第31図1~18・20)



グリッド出土遺物㊟ (第31図19)



グリッド出土遺物㊟ (第33図)

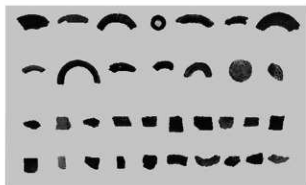


グリッド出土遺物㊸ (第34図)

グリッド出土遺物㊸ (第35図12)

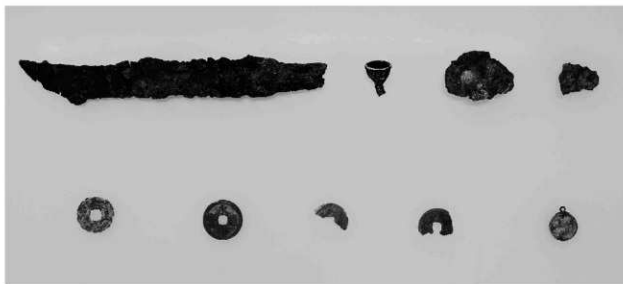


グリッド出土遺物㊸ (第35図1~11)



グリッド出土遺物㊸ (第36図)

グリッド出土遺物㊸ (第37図)



グリッド出土遺物㉞ (第38図)



グリッド出土遺物㉟ (第39図)



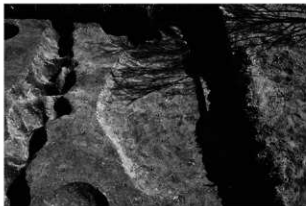
グリッド出土遺物㊱ (第40図)



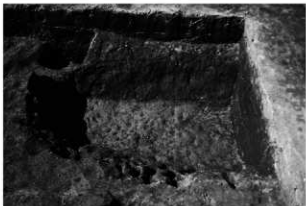
第12地点調査全景



第2号掘立柱建物跡



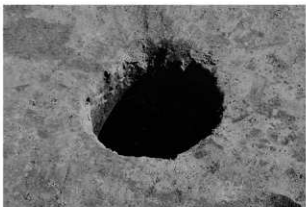
第7号土坑



第3号溝跡（東より）



第3号溝跡（南より）



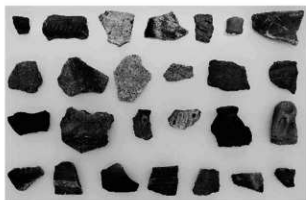
第1号井戸跡



第1号地下式坑（西より）

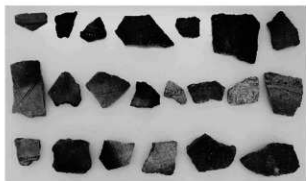


第1号地下式坑（北より）



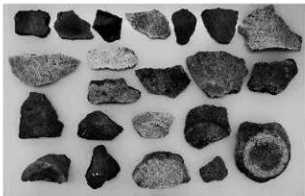
掘立柱建物跡・土坑・溝跡・井戸跡・
ビット出土遺物 (第47図)

地下式坑出土遺物① (第49図)



溝跡出土遺物 (第48図)

地下式坑出土遺物② (第50図)



地下式坑・調査区出土遺物① (第53図1~12)



地下式坑出土遺物③ (第51図)



地下式坑・調査区出土遺物② (第53図13)



調査区出土遺物 (第52図)

報 告 書 抄 録

イリゴウチイセキ(ダイジュウ・ジュウニチテン)								
書 名 入耕地遺跡(第10・12地点)								
副 書 名 市内遺跡群発掘調査報告書 XXXI								
シ リ ー ズ 名 白岡市埋蔵文化財調査報告書第28集								
編 著 者 名 杉山 和徳 奥野 麦生								
編 集 機 関 白岡市教育委員会								
所 在 地 〒349-0292 埼玉県白岡市千駄野432 TEL. 0480-92-1111								
発 行 年 月 日 2019(平成31)年3月29日								
所収遺跡	所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
入耕地遺跡	第10地点 白岡909-1 第12地点 白岡904-1の一部	11445	018	36° 01′ 06″	139° 39′ 29″	第10地点 20110406 ～ 20110427 第12地点 20170207 ～ 20170313	第10地点 118 第12地点 118.2	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
入耕地遺跡	集落	縄文時代後・晩期中・近世	掘立柱建物跡2棟 土坑7基 溝跡3条 井戸跡1基 地下式坑1基	縄文土器・陶器・磁器・土製品・石器・鉄滓		縄文時代後・晩期の環状盛土遺構内を調査した。亀形土製品が出土した。		
<p>遺跡の概要 縄文時代後期から晩期の環状盛土遺構に伴う遺物が多く出土した。</p>								

白岡市埋蔵文化財調査報告書第28集

入耕地遺跡（第10・12地点）

市内遺跡群発掘調査報告書XXV

平成31年3月22日 印刷

平成31年3月29日 発行

発行 白岡市教育委員会

印刷 朝日印刷工業株式会社